

米子市
教育文化事業団
文化財調査報告書 1

岡成第9遺跡

1993.3
米子市教育文化事業団

四二 誤表

ページ	行	誤	正
例 言	1 1	米子市文化事業が	米子市教育文化事業團が
2	2	岡成原 6 6 0 地に	岡成原 6 6 0 他に
5	3	堅穴住居 5 基・掘立柱建物 1 1 基	堅穴住居 5 棟・掘立柱建物 1 1 棟
5	2 7	堅穴住居 6 基	堅穴住居 6 棟

例　　言

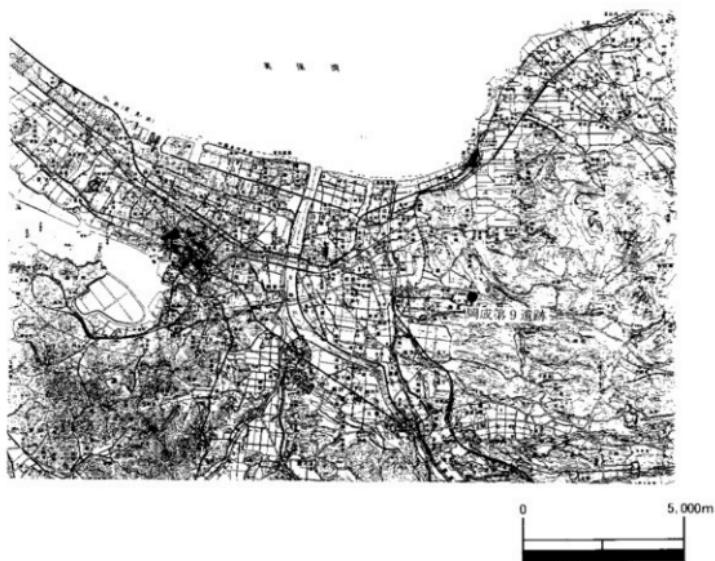
1. 本書は、平成4年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した岡成第9遺跡発掘調査にかかる報告書である。
2. 調査の組織は下記の通りである。
調査委託 株式会社大上建築
調査主体 米子市教育文化事業団 理事長 森田 隆朝
調査担当 米子市教育文化事業団 調査員 藤原裕子
調査協力 潘脇俊彦（就将小学校教諭）・中曾千里（米子市教育文化事業団調査員）
調査助言 杉谷愛象（米子市教育委員会社会教育課主任）・下高瑞哉（同主事）
3. 出土遺物はすべて米子市教育委員会で保管している。
4. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は米子市教育文化事業団がこれを行った。

目　　次

例　　言

目　　次

I. 調査に至る経緯	2
II. 周辺の歴史的環境	2
III. 調査の概要	
1. 積穴住居跡(SI)	6
2. 掘立柱住居跡(SB)	20
3. 溝状遺構(SD)	30
4. 土壙墓(SX)	43
5. 土壙(SK)	43
6. そ の 他	45
IV. 小　　結	45



第1図 調査位置図

I. 調査に至る経緯

岡成第9遺跡は米子市岡成字岡成原660ほかに所在する。調査地は、米子市の東大山の麓の丘陵に位置している。

平成2年7月株式会社大上建築より、米子市岡成字岡成原660ほかにおける埋蔵文化財有無の照会が米子市教育委員会にあった。該当地付近には、縄文時代～奈良時代の遺跡が多く発見されていることから、米子市教育委員会によって平成3年1月、現地試掘調査を行った。調査の結果、開発予定地全域において遺跡の存在を確認した。

米子市教育委員会と株式会社大上建築の協議の結果、本調査の実施を決定し、大上建築より発掘調査の委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団が平成4年4月15日から平成4年6月30日まで本調査を行った。

II. 周辺の歴史的環境

岡成第9遺跡は、米子市岡成字岡成原660ほかに所在する。ここは米子市街地からほぼ東に9km、大山の麓に位置する。周辺には、縄文時代から中世に至る数多くの遺跡が分布している。喜多原第1・2遺跡では弥生時代の住居跡、喜多原第3・4遺跡では縄文時代と推定される落し穴、大形の掘立柱住居跡などが確認されている。また、岡成古墳群、百塚古墳群などの古墳も多く分布している。さらに中世城郭の尾高城にも近い距離にある。

先土器時代の遺溝としては明確なものは明らかになっていないが、淀江町小波出上のナイフ形石器や同中西尾の柳葉状尖頭器、岸本町貝田原遺跡(18)の有舌尖頭器はこの時期のことを知る貴重な遺物である。

縄文時代になると、大山山麓の台地上や宇田川流域の低湿地などに多くの遺跡が分布している。上福万遺跡(14)は早期の押型文土器や燃糸文土器などが多量に出土しており土壙や集石遺溝等が確認された。また、淀江町鰐ヶ口遺跡(28)は前期に形成された遺跡で押し引き沈線文土器や九州の曾畠式土器に類似したものが出土しており、この時期の地域間交流を窺うことが出来よう。また土器の他にも石鎌・石斧・石皿、さらに多量の石錘が出土しており、当時の採集・狩猟・漁労等を中心とした人々の生活を知ることができる。

中期の遺跡は現在確認されていないが、後・晚期の遺跡では米子市喜多原第3・4遺跡(5・6)・淀江町河原田遺跡が知られている。同遺跡からは磨消縄文、凹線文等の土器や石斧、石鎌が多量に出土している。

弥生時代になると縄文時代の採集経済から稲作を中心とした生産経済へと転換する。前期の遺跡は周辺において現在確認されていないが、米子市日久美遺跡・会見町諸木遺跡等の遺跡として挙げることが出来る。中期になると農耕技術の向上、人口増加等の諸要因から低湿地から沖積低地、沖積台地へと移行し遺跡は増加する。遺跡には岸本町岸本原遺跡



第2図 周辺遺跡地図

(16)・淀江町角田遺跡（29）米子市尾高遺跡（7）等がある。後期になると中期に安定した農業生産を背景に谷間や山間部まで遺跡は拡散していく。遺跡は中期から継続して集落が営まれる一方、米子市岡成第9遺跡（1）・喜多原第1・2遺跡（3・4）淀江町井手挾遺跡（25）など後期になってからの遺跡もある。

古墳時代前期になると、米子市石州府29・30・119号古墳（15-1）が営まれる。中期になると淀江町上ノ山古墳・岸本町吉定古墳群（19）が営まれる。後期になると淀江町向山古墳群（31）に代表される首長墓や、米子市尾高古墳群（8）・石田古墳群（9）・日下古墳群（12）・淀江町百塚古墳群（10）・中間古墳群（11）・中西尾古墳群（26）等の群集墳が営まれるようになる。

古墳時代前期の集落として、米子市上福万遺跡・石州府古墳群（15-2）・弥生時代より引き続き営まれ、井手挾遺跡が挙げられる。中期の遺跡として3棟の竪穴式住居の確認された百塚第6遺跡、後期の遺跡では淀江町福頼遺跡（24）がある。また岸本町越敷ヶ丘遺跡（20）は古墳時代から奈良時代にかけての集落である。

古墳時代が終り、律令体制が施行されるようになると、氏寺の造営が盛んになり岸本町大寺庵寺（21）・淀江町上淀庵寺（32）が、平安時代になって岸本町坂中庵寺が造られる。

周辺遺跡一覧表

No	名 称	所 在 地	種 別	概 要
1	岡成第9遺跡	米子市岡成	住居跡	堅穴住居5棟・掘立柱建物11棟
2	岡成古墳群	米子市岡成	古墳群	古墳
3	喜多原第1遺跡	米子市泉	住居跡	堅穴住居
4	喜多原第2遺跡	米子市泉	住居跡	堅穴住居
5	喜多原第3遺跡	米子市泉		落し穴
6	喜多原第4遺跡	米子市泉		落し穴・掘立柱建物
7	尾高城跡	米子市尾高	城跡	青磁・白磁・土師器
8	尾高古墳群	米子市尾高	古墳群	古墳
9	石田古墳群	米子市尾高	古墳群	古墳
10	百塚古墳群	西伯郡淀江町	古墳群	古墳・堅穴住居・掘立柱建物
11	中間古墳群	西伯郡淀江町	古墳群	古墳
12	日下古墳群	米子市日下	古墳群	古墳・横穴12基
13	日下遺跡	米子市日下	散布地	弥生土器・土師器
14	上福万遺跡	米子市上福万	縄文遺構	縄文土器・堅穴住居・掘立柱建物
15	石州府古墳群	米子市石州府	古墳群	古墳112基
16	岸本原遺跡	西伯郡岸本町	住居跡	堅穴住居
17	岸本要害跡	西伯郡岸本町		中世遺構
18	貝田原遺跡	西伯郡岸本町	住居跡	堅穴住居・掘立柱建物
19	吉定遺跡	西伯郡岸本町	古墳群	古墳
20	越數ヶ丘遺跡	西伯郡岸本町	古墳	堅穴住居・石蓋土壙墓
21	大寺廃寺跡	西伯郡岸本町	廃寺跡	石製鷲尾・瓦・古印
22	坂中廃寺跡	西伯郡岸本町	廃寺跡	基壇・布目瓦
23	長者原古墳群	西伯郡岸本町	古墳群	古墳・屋敷跡
24	福頼遺跡	西伯郡淀江町	住居跡	須恵器
25	井手挾遺跡	西伯郡淀江町	古墳・住居跡	古墳2基・堅穴住居6棟・溝状遺構
26	中西尾古墳群	西伯郡淀江町	古墳群	古墳
27	河原田遺跡	西伯郡淀江町		縄文後期～晩期・石斧・石鏃
28	鮒ヶ口遺跡	西伯郡淀江町		縄文早期～前期・石斧・石鏃・石皿
29	角田遺跡	西伯郡淀江町	条里	弥生線刻絵画土器片
30	井手勝遺跡	西伯郡淀江町		
31	福岡古墳群	西伯郡淀江町	古墳群	古墳
32	上淀廃寺跡	西伯郡淀江町	廃寺跡	壁画

III. 調査の概要

現地での調査は、平成4年4月15日から開始し、平成4年6月30日まで行った。黒色土が厚さ30~50cmにわたって堆積しており、重機によってこの黒色土をほぼ除去し、その後人力による掘り下げを行い、遺構を検出する方法を取った。その結果、堅穴住居跡5棟、掘立柱住居跡11棟・溝状遺構4基・土壙墓37基・土壙4基を検出した。

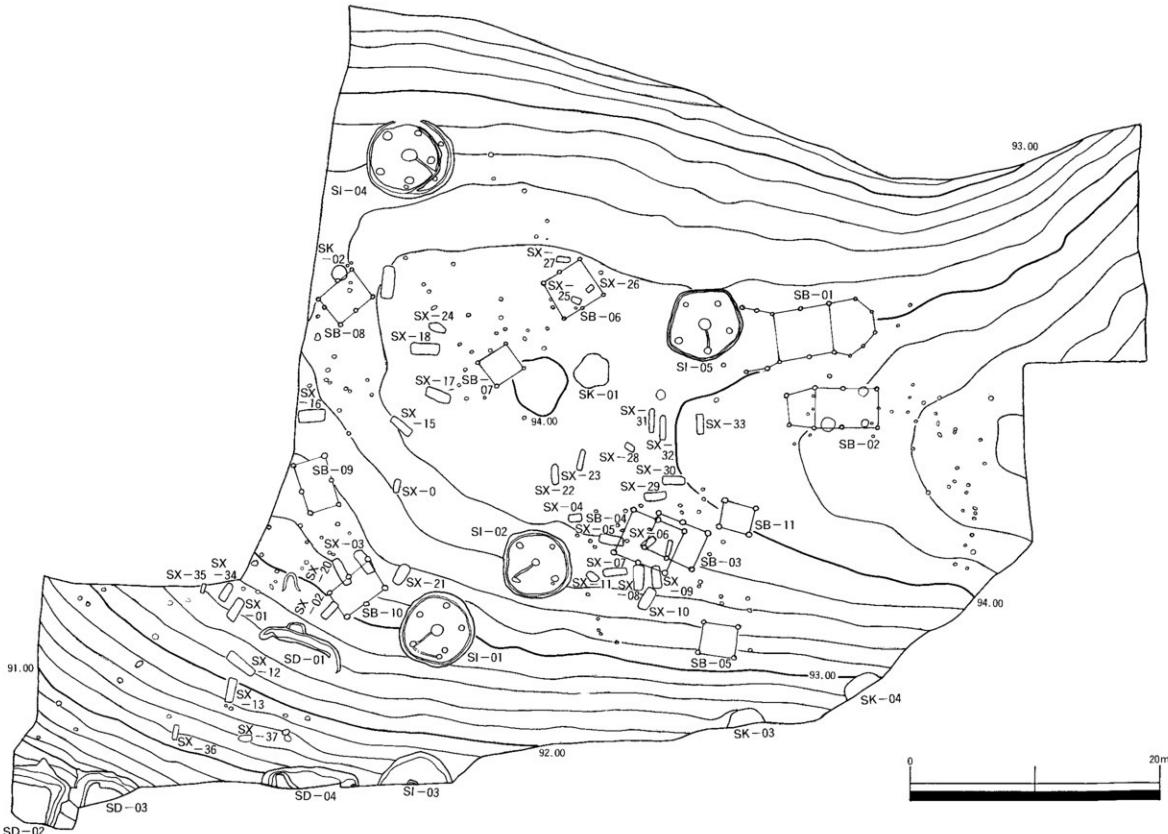
1. 堅穴住居跡

全部で5棟検出した。規模としては全体的にやや大きめで、時期的には弥生時代後期のものと考えられる。

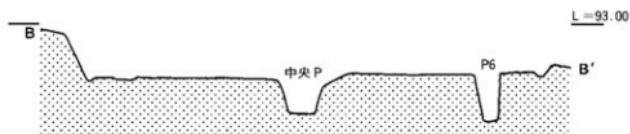
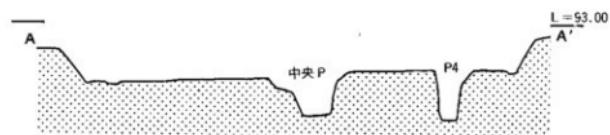
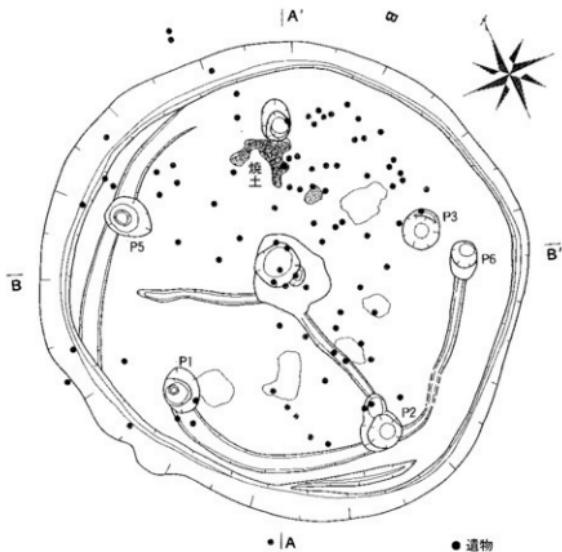
SI-01（第4図） 丘陵尾根の南側に位置する。平面側は円形で、直径6m、残存壁高約51cm、床面積21.62m²を測る。壁下には幅約10cm、深さ約6cmの側溝が巡っている。床面で柱穴6個を検出し、北側より逆時計周りにP1~P5とし、P3に隣接する柱穴をP6とする。各柱穴プランはP1（径35cm×32cm~66cm）、P2（径41cm~68cm）、P3（径52cm×48cm~52cm）、P4（径35cm×31cm~61cm）、P5（径60cm×50cm~47cm）、P6（径32cm~60cm）で、P1・P5は底部をさらに掘り窪めた二段掘りの柱穴である。各柱穴間距離はP1-P2（2.0m）、P2-P3（2.5m）、P3-P4（1.8m）、P4-P5（1.75m）、P5-P1（1.75m）である。床面中央に径約58cm×55cm、深さ44cmの中央ピットを検出した。中央ピットとP2をつなぐ幅約6cm、深さ約3cmの溝が確認できた。床面の内側に僅かではあるが、ほぼ全体に溝状の跡が見られることから、P6はP3の柱を移動して拡張したものと考えることができる。しかし、P3を除く他の四つの柱穴は移動した痕跡がなく、P2・P5の柱は溝の中に建てられていたことになり、さらに南側の溝が比較的のしっかりしているのに比べ、他部分の溝は幅が広く明瞭ではないことから、拡張されたのは南側のみで、他部分の溝は別の用途で使われていたのではないかと考えることが出来る。床面には焼土及び炭を検出した。

出土遺物（第5図） 遺物は弥生土器甕口縁部9（No.1~9）、弥生土器壺口縁部5、（No.10~14）、弥生土器鉢2（No.15~16）、弥生土器高杯3（No.17~19）、弥生土器底部2（No.20~21）、把手（No.22）、小玉（No.23）、石鎌（No.24）を検出した。時期は弥生時代後期と考えられる。

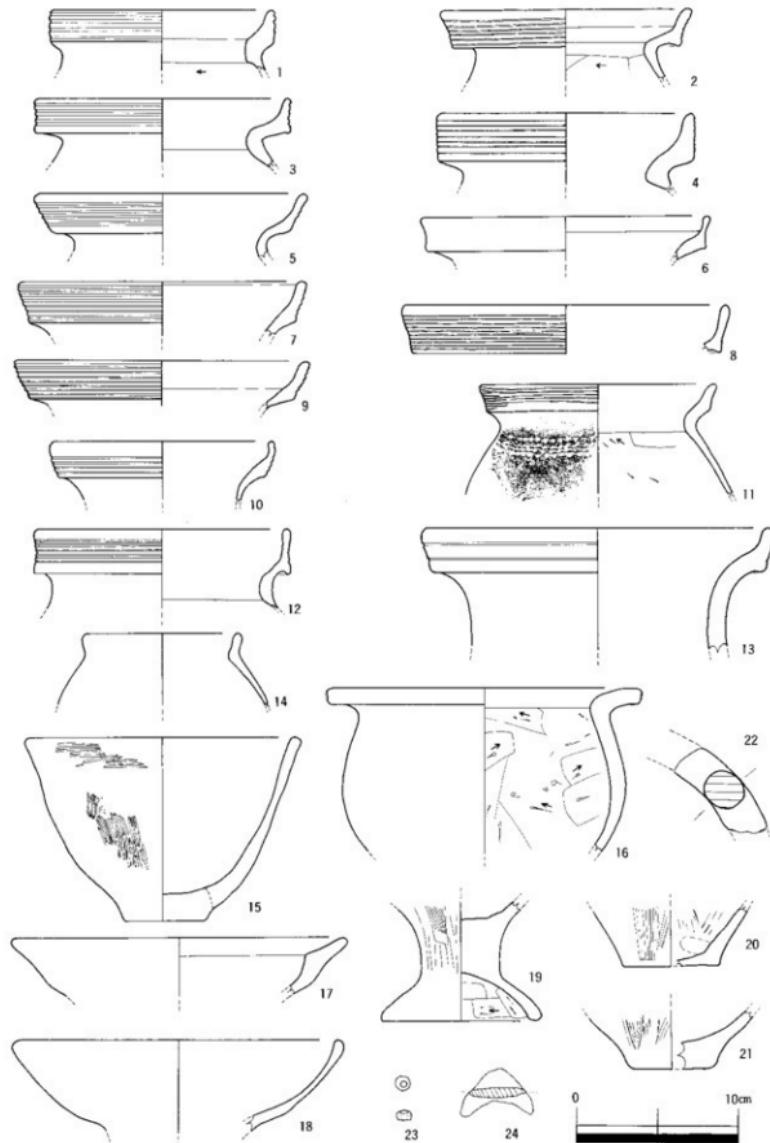
SI-02（第6図） 丘陵尾根の南側SI-01の東約3.5mに位置する。平面形は円形に近い隅丸方形で、長軸5.30×短軸5.10m、残存壁高13~35cm、床面積18.905m²を測る。壁下には幅約10cm、深さ約5cmの側溝が巡っている。さらに内側にも僅かに溝状の跡が残る。床面で柱穴4個を検出し、北側より時計周りにP1~P4とし、P3に隣接する柱穴をP5とする。各柱穴プランはP1（径50cm×49cm~49cm）、（推定径35cm~40cm）、P2（径45cm×40



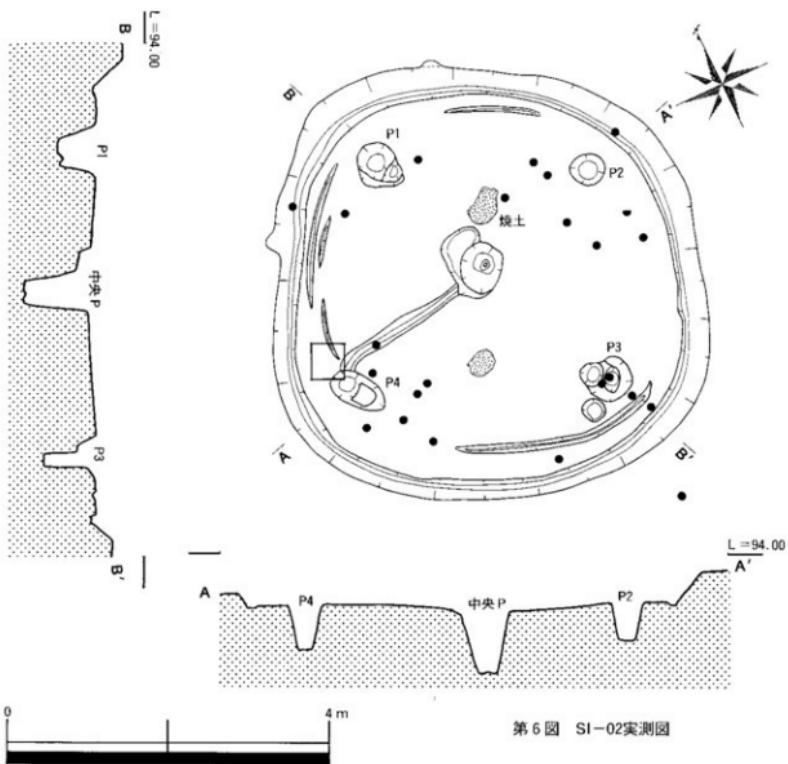
第3図 調査地遺構全体図



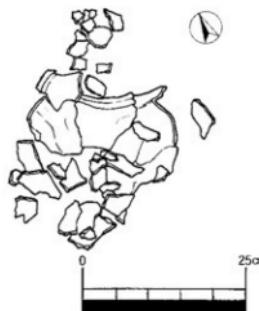
第4図 SI-01実測図



第5図 SI-01遺物実測図

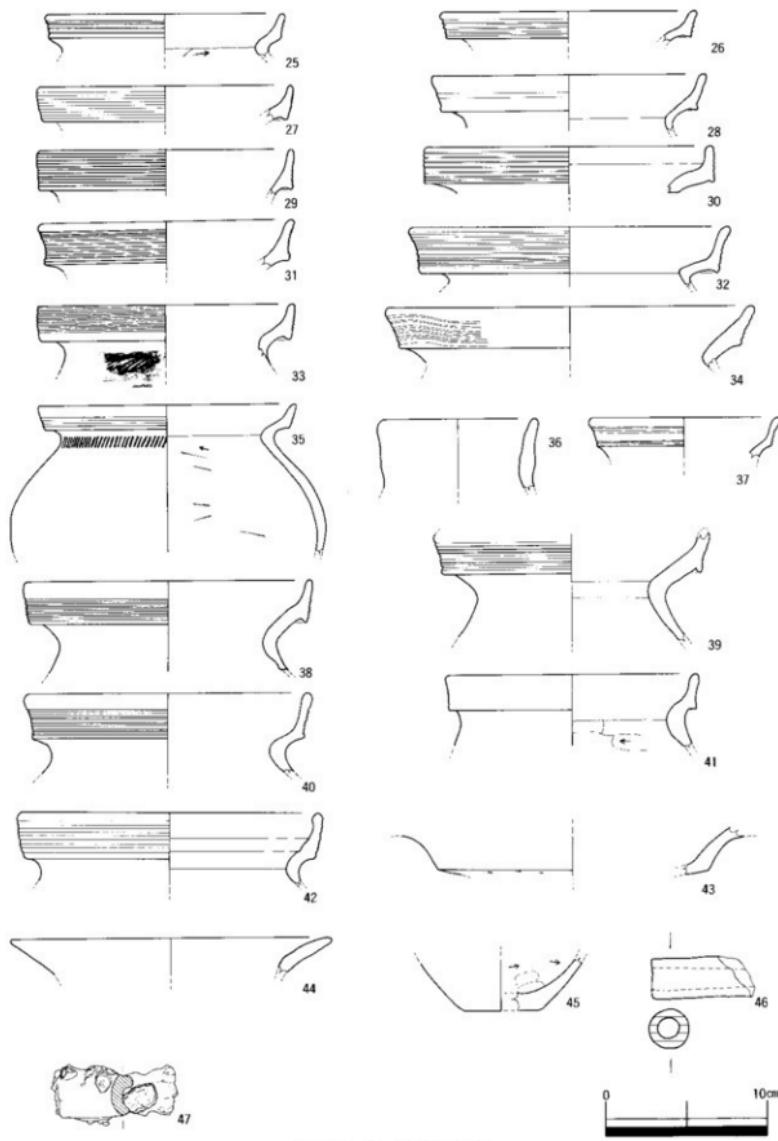


第6図 SI-02実測図



第7図 遺物出土状況

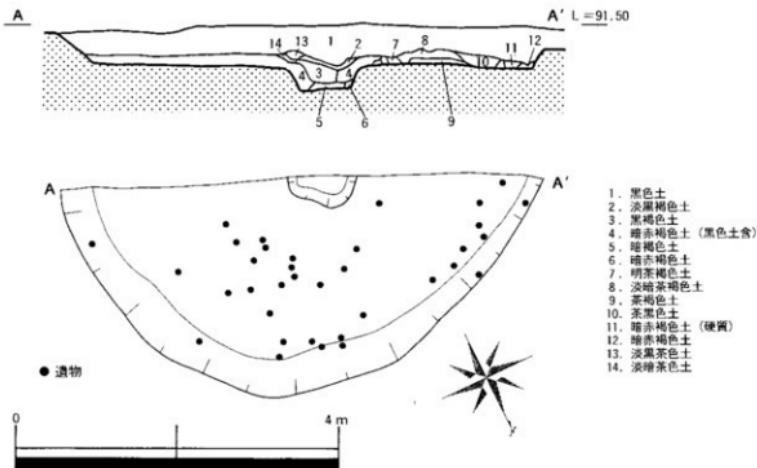
cm - 48 cm)、P3 (径約29 cm - 58 cm)、(径推定35 cm - 62 cm)、P4 (径40 cm - 56 cm)、P5 (径27.5 cm - 64 cm)である。各柱穴間距離はP1-P2 (2.2m)、P2 - P3 (2.2m)、P3-P4 (2.6m)、P4 - P1 (2.5m)である。床面中央に径130 cm × 105 cm、深さ79 cmの底中央部が若干盛り上がっているピットを検出し



第8図 SI-02遺物実測図

た。中央ピットとP4をつなぐ幅約10cm、深さ約3cmの溝を検出した。P5はP3を移動したものと考えられ、溝の痕跡も残っていることから、僅かではあるが拡張したと考えられる。P1・P3についてはそれぞれ大きさの異なる二つの穴が複合していることから、柱穴を移動したのではなく補助的な柱を建てていたのではないかと思われる。床面には焼土を検出した。

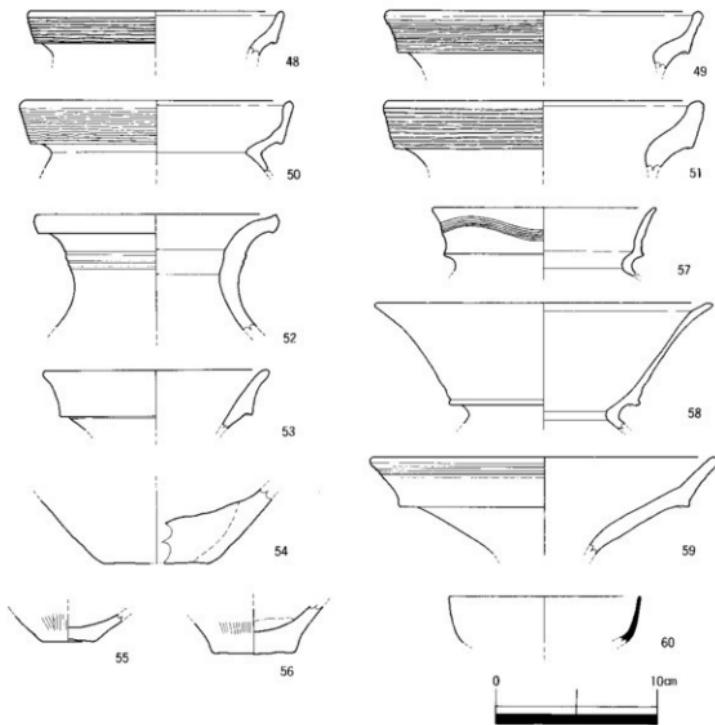
出土遺物（第8図） 遺物は弥生土器甕口縁部10（No.25～34）、弥生土器壺口縁部8（No.35～42）、弥生土器器台2（No.43・44）、弥生土器底部（No.45）、弥生土器器注口部（No.46）、鉄斧（No.47）を検出した。時代は弥生時代後期でSI-01よりは若干古いと考えられる。



第9図 SI-03実測図

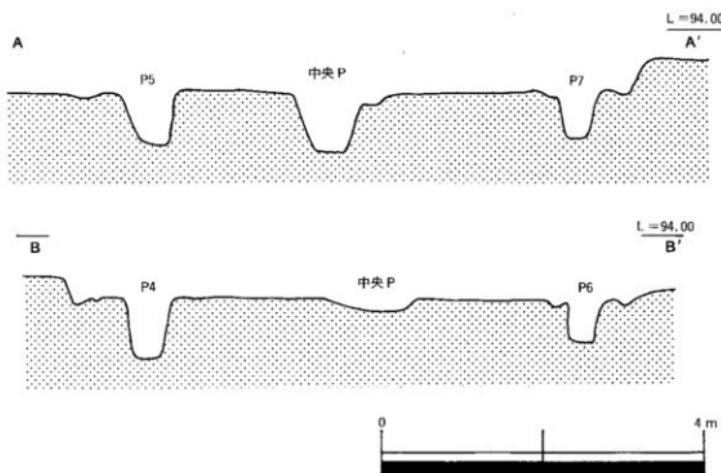
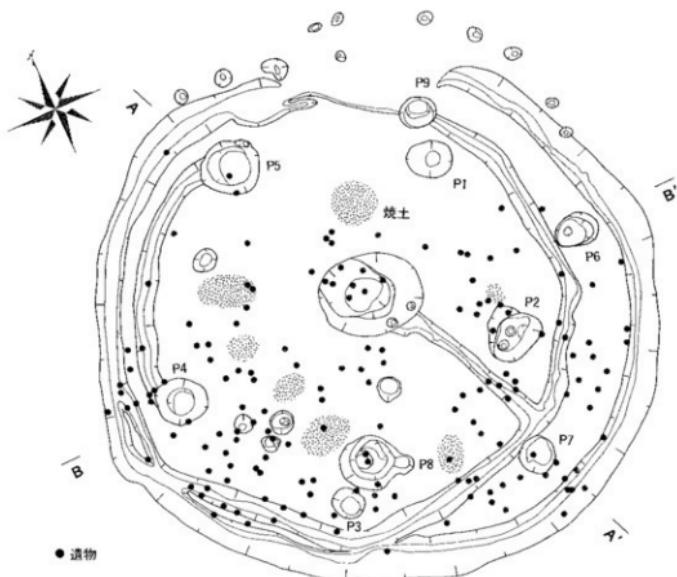
SI-03（第9図） 斤陵尾根の南側SI-01の南西約7.0mに位置する。調査区外に掛りほぼ半分しか調査できなかったが、平面形は円形で、直径6m、残存壁高60cm、検出床面積9.195m²（推定床面積28.26m²）を測る。側溝の顕著な痕跡は検出できなかった。床面では柱穴は全く検出されず、床面中央と思われる部分より径40cm、深さ30cmのピット1個を検出した。床面には焼土及び炭は検出されなかった。

出土遺物（第10図） 遺物は弥生土器甕4（No.48～51）、弥生土器壺1（No.52）、弥生土器器台（No.53）、弥生土器底部3（No.54～56）、古式土師器壺1（No.57）、土師器器台2（No.58・59）、須恵器壺（No.60）を検出した。遺物に時期的な広がりがあるが、検出層位に違いないことから、遺構に伴う遺物を確定出来ない為時期は不明である。

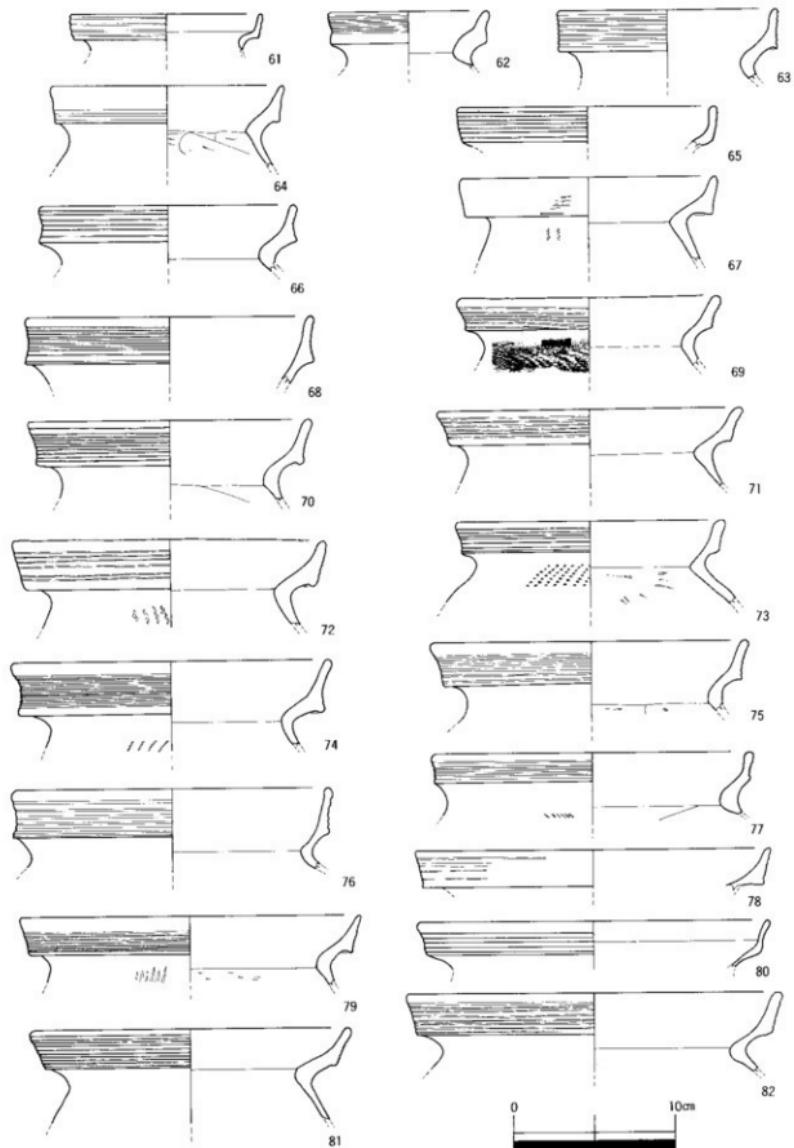


第10図 SI-03遺物実測図

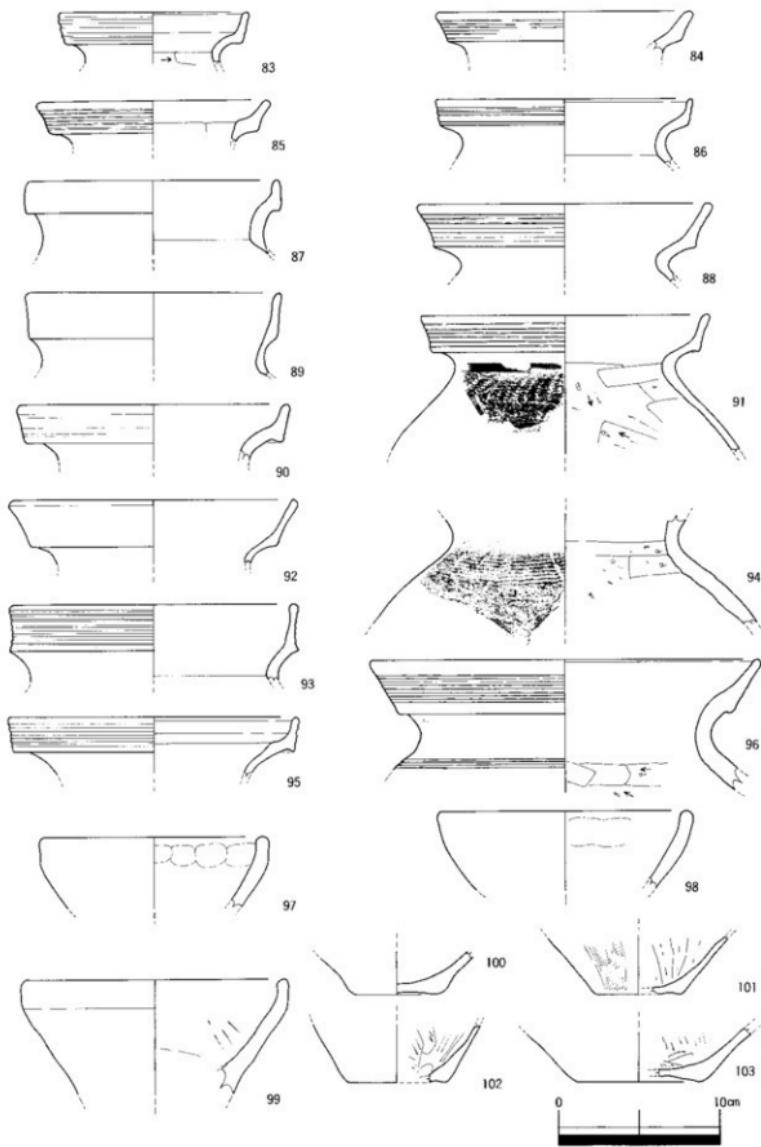
SI-04（第11図） 丘陵尾根の北側SI-01の北北東約32.0mに位置する。平面形は建築当初西側がやや円を成しているがほぼ五角形で、長軸短軸ともに5.5m、残存壁高0~38cm、床面積約22.24m²を測る。壁下には幅13cm、深さ6cmの側溝が巡っている。なお本住居は特に東に拡張した痕跡が明瞭に残り、拡張後は長軸7m×6.40m、床面積29.10m²を測る。床面で柱穴9個を検出し、うち建築当初の柱穴はP1・P2・P4・P5・P8の5個、拡張時の柱穴はP4・P5を固定し、P3・P6・P7・P9を加えた6個であると考えられる。各柱穴プランはP1（径62×45~46cm）、P2（径67×65~50cm）、P3（径35~65cm）、P4（径60~72cm）、P5（径70×65~64cm）、P6（径47×40~52cm）、P7（径45×43~59cm）、P8（径70×65~80cm）、P9（径43×38~34cm）である。P4・P6・P8は底部をさらに掘り込んだ二段掘りで、P5・P9は上部を一段掘り下げた二段掘りとなっている。またP2は底



第11図 SI-04実測図



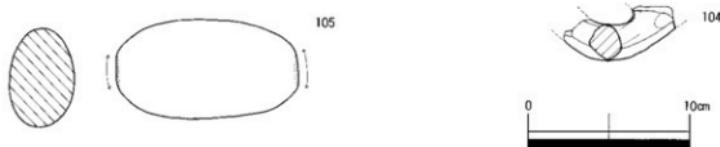
第12図 SI-04遺物実測図(1)



第13図 SI-04遺物実測図(2)

部を掘り下げたくぼみが二つあり、断面にも柱の痕跡が2本明瞭に残っていることから、柱の立て替えをしたと考えられる。各柱穴間距離はP1-P2 (1.22m)、P2-P8 (1.22m)、P8-P4 (1.22m)、P4-P5 (1.47m)、P5-P1 (1.25m)、P9-P6 (1.23m)、P6-P7 (1.40m)、P7-P3 (1.22m)、P3-P4 (1.22m)である。床面中央には径125cm×103cm、深さ74cmの中央ピットを検出した。中央ピットは二段掘りで、上部に径10cm、深さ12cmの小ピットを伴っている。さらに中央ピットから南東へ幅約8cm、深さ約3cmの溝が走行し、内側の溝に接している。またP4とP5をつなぐ幅約12cm、深さ約3cmの溝を検出した。床面全体に焼土及び炭を検出したが、南西側に特に集中していた。本住居の北側壁外に、溝に沿って径14~24cm、深さ9~28cmのやや小さめのピットを検出したがその性格は不明である。

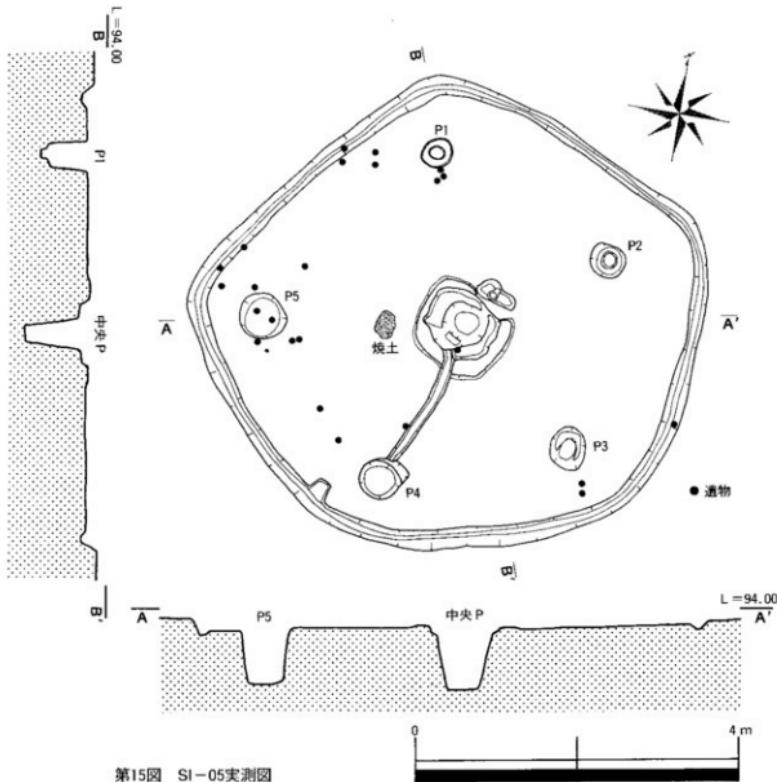
出土遺物（第12~14図） 遺物は弥生土器甕22（Na61~82）、弥生土器壺14（Na83~96）、弥生鉢3（Na97~99）、底部4（Na101~103）、把手（Na104）、石器（Na105）を検出した。時代は弥生時代後期でSI-01とはほぼ同時期と考えられる。本住居は拡張されたことが明らかであるが、住居内に置ける遺物による前後関係は見られない。



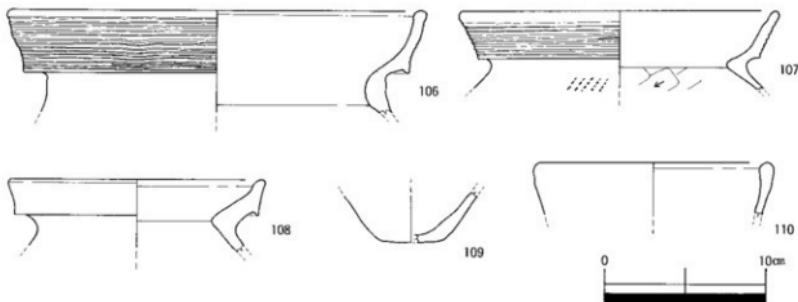
第14図 SI-04遺物実測図(3)

SI-05（第15図） 丘陵尾根の中央よりやや北側SI-02の東北東約18.0mに位置する。地山への掘り込みが浅く、ほとんど床面しか残っていない検出状態であった。平面形は隅丸五角形で直径5.80m、残存壁高5cm、床面積23.92m²を測る。壁下には幅約9cm、深さ約6cmの側溝が巡っている。床面で柱穴5個を検出し、北側より時計回りにP1~P5とする。各柱穴プランはP1（径40cm×36cm~56cm）、P2（45cm×40cm~74cm）、P3（55cm×42.5cm~64cm）、P4（径50cm×46cm~50cm）、P5（60cm×57cm~61cm）で、P1・P2は底部をさらに掘り廻めた二段掘りの柱穴である。各柱穴間距離はP1-P2 (2.1m)、P2-P3 (1.88m)、P3-P4 (1.87m)、P4-P5 (1.95m)、P5-P1 (2.52m)である。床面中央に一辺176cm×155cm、深さ75cmのピットを検出した。ピットの上部を僅かに方形に掘り廻め、さらに縁をやや盛っている。中央ピットとP4をつなぐ幅約7cm、深さ約2cmの溝を検出した。床面には焼土を一ヵ所検出した。その他拡張等の痕跡は検出されなかった。

出土遺物（第16図） 遺物は弥生土器甕2（Na106~107）、弥生土器壺（Na108）、弥生土器底部（Na109）、鉢（Na110）を検出した。時期は弥生時代後期であると思われるが、本遺跡堅穴住居の中では比較的新しい時期のものと考えられる。



第15図 SI-05実測図

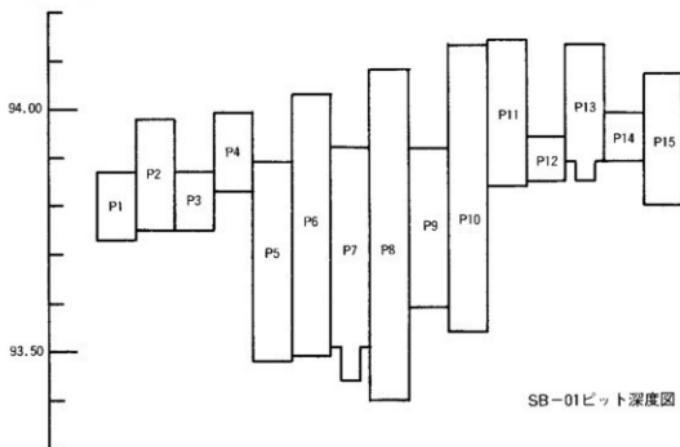


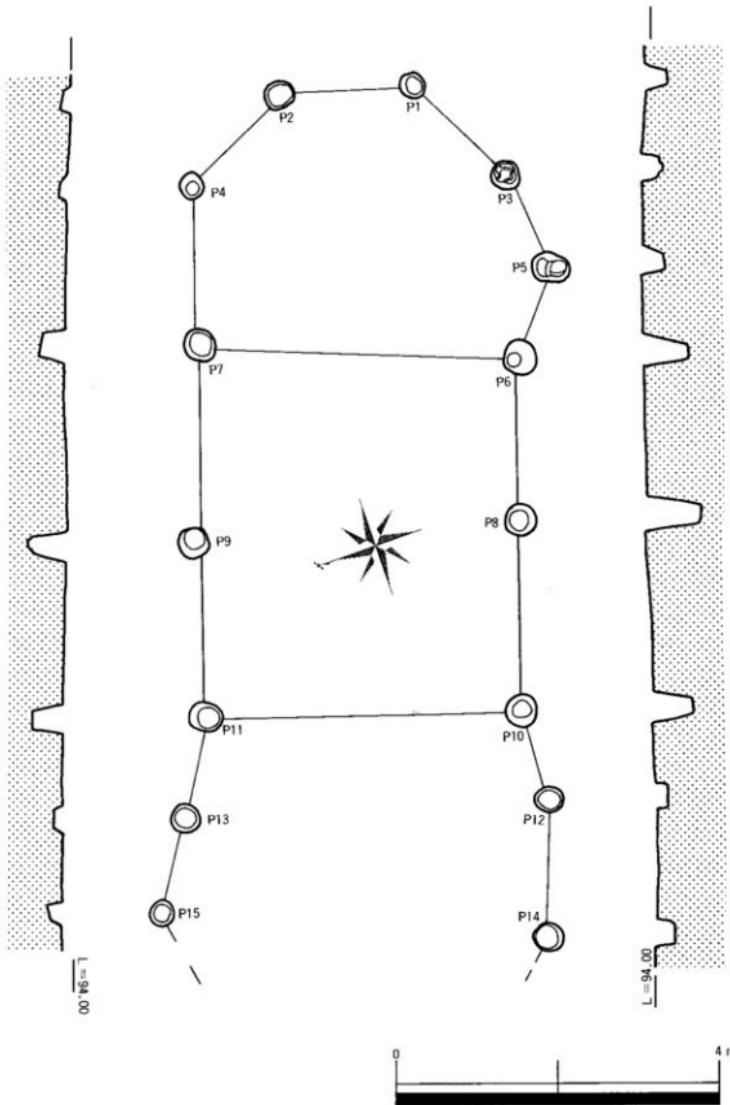
第16図 SI-05遺物実測図

2. 掘立柱建物跡

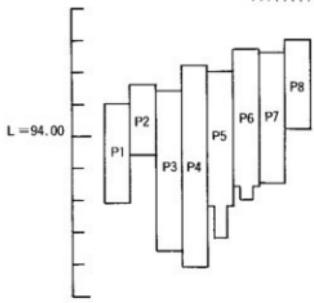
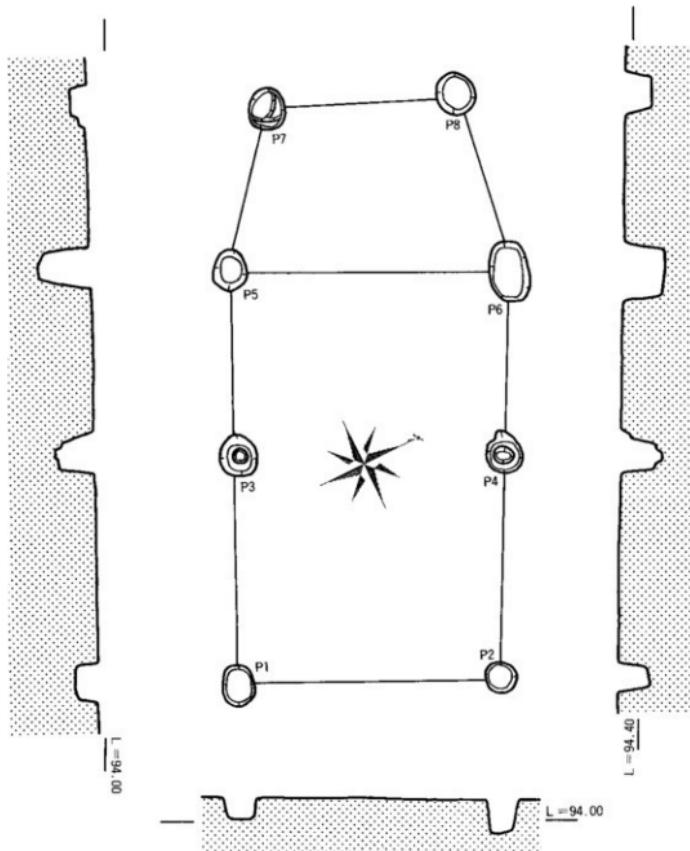
全部で11棟を検出した。これらのうち周辺から検出された遺物から弥生時代後期のものと考えられるもの9棟を数える。SB-01・SB-02については形態的に、弥生時代の掘立柱住居とは異なるものと考えられ、本遺跡に近い喜多原第4遺跡で同タイプのものが検出されており縄文時代のものと考えられている。

SB-01 (第17図) 丘陵尾根の中央よりやや北側SI-05の南東に位置する。長軸はN108.0°E方向を向き、梁間1間、桁行2間で東西に張り出し部を有する建物であると思われる。西側の一部はSI-05によって切られていると考えられる。桁行長4.4m、妻通長3.9m、床面積17.16m²、東側張り出し部4.4×3.3mの不整円形を呈し、床面積約11.68m²、西側張り出し部4.5×(推定)3.2m、推定床面積13.44m²、総全長推定11.5m、総床面積約42.28m²を測る。柱穴は6個、東張り出し部分5個、西張り出し部分4個が残る。各柱間距離はP6-P7(3.56m)、P6-P8(1.6m)、P8-P10(1.94m)、P7-P9(2.04m)、P9-P11(1.8m)、P10-P11(3.46m)、P6-P5(0.74m)、P5-P3(0.86m)、P3-P1(1.24m)、P1-P2(1.26m)、P2-P4(1.21m)、P4-P7(1.58m)、P10-P12(0.78m)、P10-P14(1.34m)、P11-P13(0.92m)、P13-P15(0.86m)である。P3・P5は底部をさらに掘り窪めた二段掘りの柱穴である。各柱穴プランはP1(径30cm-29cm)、P2(径35cm-16cm)、P3(径35cm-27cm)、P4(径34cm×28cm-8cm)、P5(径46cm×33cm-27cm)、P6(径43cm×40cm-58cm)、P7(径41cm×37cm-34cm)、P8(径40cm×38cm-68cm)、P9(径38cm-47cm)、P10(径39cm-53cm)、P11(径42cm×35cm-42cm)、P12(径36cm×30cm-16cm)、P13(径35cm-14cm)、P14(径35cm-25cm)、P15(径31cm-18cm)である。P6-P11で主柱穴を構成し、張り出し部分に当たる柱穴は中央部の柱穴に比べ径が若干小さく、深さも浅いことから、中央部とは明らかに違う補助的な柱を建てていたのではない。





第17図 SB-01実測図



ピット深度表

第18図 SB-02実測図

かと思われる。

出土遺物 遺物は柱穴内から検出されなかった。

SB-02（第18図） 丘陵尾根のほぼ中央SB-01の南に隣接する。長軸はN115.5°E方向を向き、梁間1間、桁行2間で西側に張り出し部を有する建物である。桁行長5.2m、妻通長3.3m、床面積17.16m²、張り出し部2.1m×2.98mの台形を呈し、床面積4.41m²、総全長7.2m、総床面積21.57m²を測る。柱穴は6個、張り出し部分2個が残る。各柱間距離はP1-P2（2.86m）、P1-P3（2.34m）、P3-P5（1.76m）、P2-P4（2.36m）、P4-P6（1.62m）、P5-P6（2.98m）、P5-P7（1.54m）、P6-P8（1.66m）、P7-P8（1.86m）である。P3・P4・P7は底部をさらに掘り窪めた二段掘りの柱穴である。各柱穴プランはP1（径51cm×39cm-28cm）、P2（径39cm×37cm-42cm）、P3（径53cm×45cm-47cm）、P4（径45cm×40cm-52cm）、P5（径52cm×43cm-61cm）、P6（径75cm×50cm-48cm）、P7（径50cm×43cm-21cm）、P8（径52cm×49cm-33cm）である。片側ではあるが、張り出し部分があることから、SB-01と同タイプのものと考えられる。

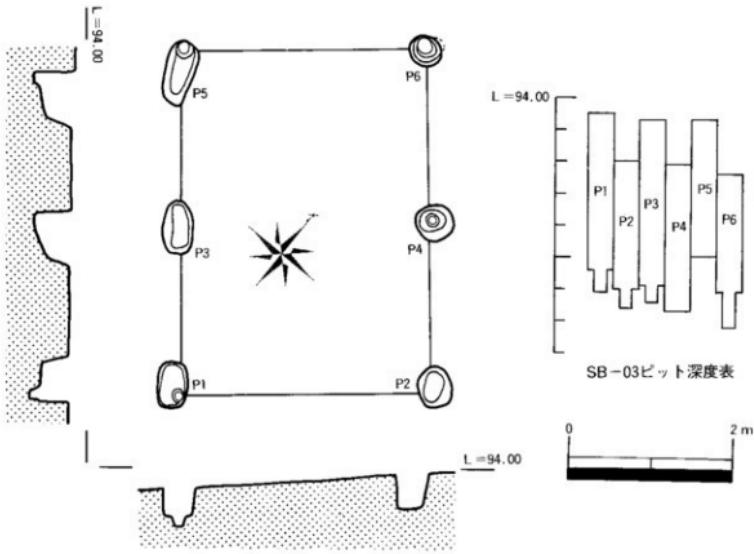
出土遺物 遺物はP6から黒曜石片を検出した。

SB-03（第19図） 丘陵尾根の南側SB-02の西13.0mに位置する。長軸はN138.5°E方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長4.3m、妻通長3.2m、床面積12.8m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2（2.86m）、P1-P3（1.34m）、P3-P5（1.18m）、P2-P4（1.54m）、P4-P6（1.72m）、P5-P6（1.6m）である。各柱穴プランはP1（径51cm×35cm-47cm）、P2（径51cm×45cm-44cm）、P3（径76cm×39cm-45cm）、P4（径46cm×33cm-61cm）、P5（径推定35cm-50cm）、P6（径40cm×37cm-56cm）である。

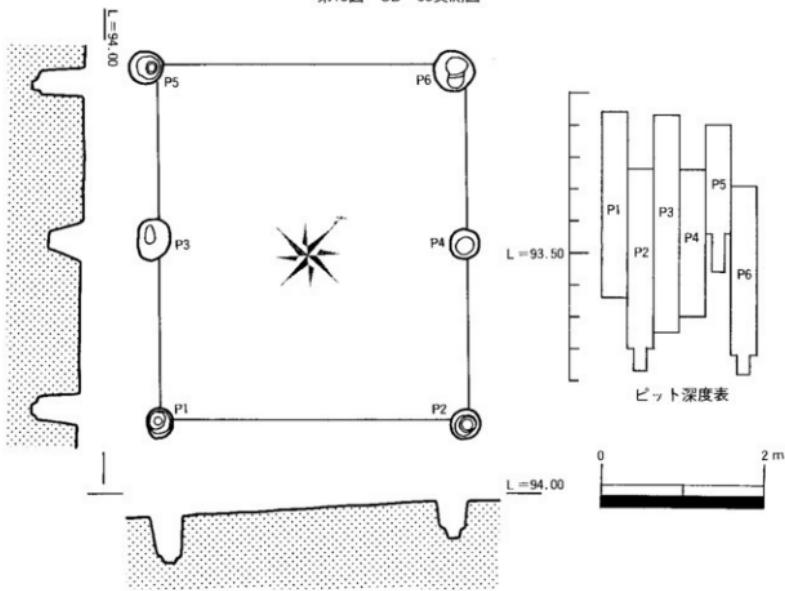
出土遺物 遺物は柱穴内から検出されなかった。

SB-04（第20図） 丘陵尾根の南側SB-03から西へ約2.5mずれて重なって位置する。長軸はN138.5°E方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長4.4m、妻通長3.8m、床面積16.72m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2（3.4m）、P1-P3（1.86m）、P3-P5（1.7m）、P2-P4（1.86m）、P4-P6（1.7m）、P5-P6（3.32m）である。各柱穴プランはP1（径42cm×36cm-59cm）、P2（径35cm×46cm）、P3（径50cm×39cm-46cm）、P4（径37cm-68cm）、P5（径41cm×38cm-64cm）、P6（径50cm×48cm-58cm）である。

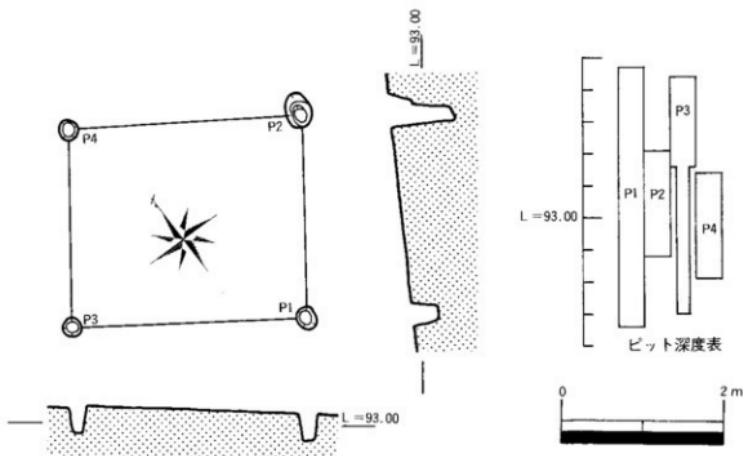
出土遺物 遺物は柱穴内から検出されなかった。



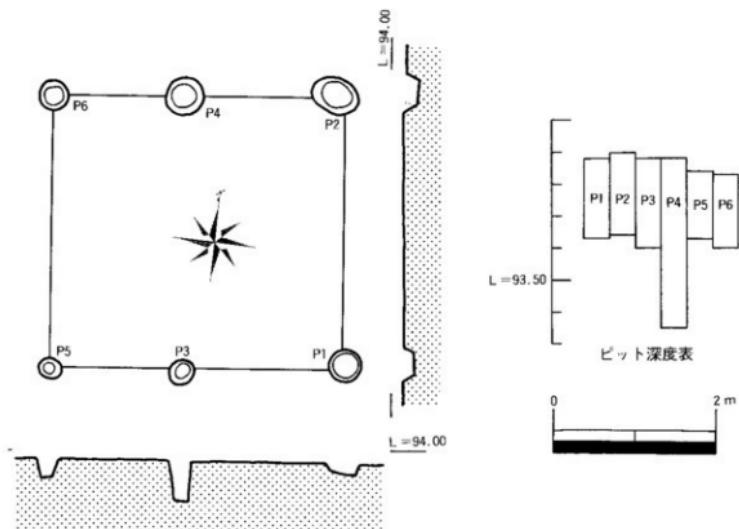
第19図 SB-03実測図



第20図 SB-04実測図



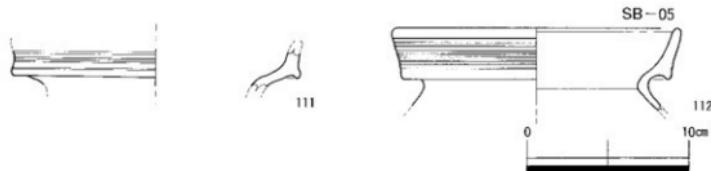
第21図 SB-05実測図



第22図 SB-06実測図

SB-05（第21図） 丘陵尾根の南側 SB-03の南約4.4mに位置する。長軸はN124.0°E 方向を向き、梁間1間、桁行1間の建物である。桁行長2.9m、妻通長2.6m、床面積7.45m²を測る。柱穴は4個を数え、各柱間距離はP1-P2(2.1m)、P1-P3(2.64m)、P2-P4(2.56m)、P3-P4(2.18m)である。各柱穴プランはP1(径27cm×23cm-35cm)、P2(径44cm×30cm-74cm)、P3(径26cm×22cm-34cm)、P4(径25cm×22cm-83cm)である。

出土遺物（第23図） 遺物はP2から弥生土器甕（No.111・112）を検出した。



第23図 SB-05遺物実測図

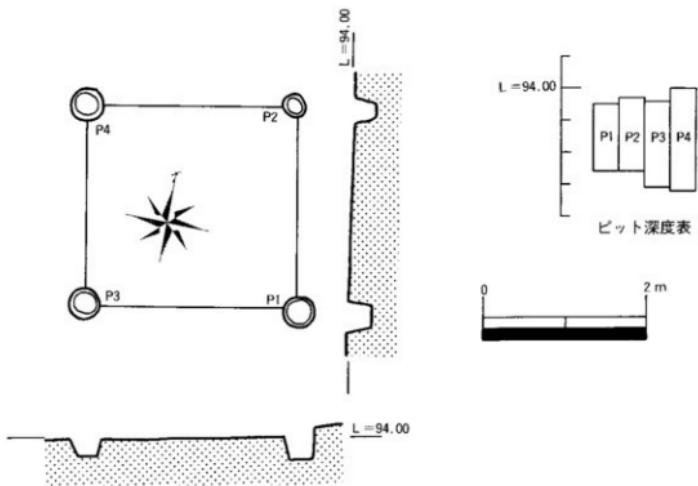
SB-06（第22図） 丘陵尾根のやや北側 SB-01の西約11.0mに位置する。長軸はN84.0°E 方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長3.7m、妻通長3.4m、床面積12.58m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2(2.92m)、P1-P3(1.68m)、P3-P5(1.3m)、P2-P4(1.32m)、P4-P6(1.18m)、P5-P6(3.06m)である。各柱穴プランはP1(径39cm×37cm-14cm)、P2(径60cm×45cm-15cm)、P3(径33cm×26cm-55cm)、P4(径48cm×44cm-30cm)、P5(径27cm×24cm-26cm)、P6(径37cm×35cm-25cm)である。

出土遺物 遺物は柱穴から検出されなかった。

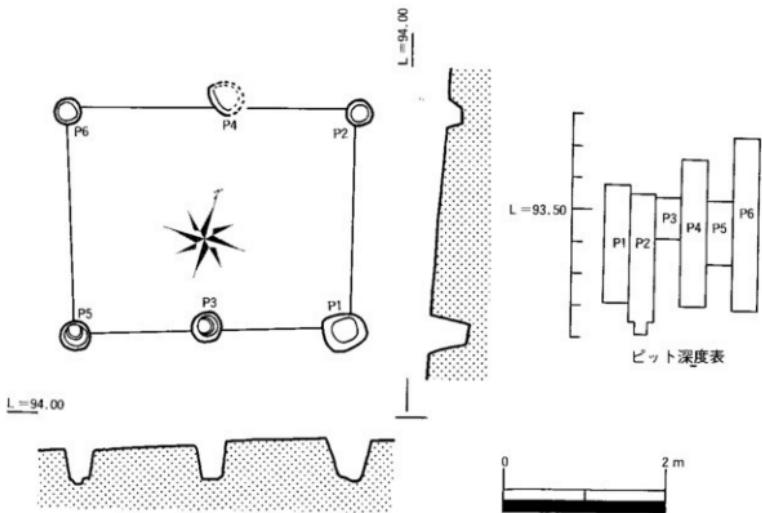
SB-07（第24図） 丘陵尾根のはば中央 SB-06の南西約5.0mに位置する。長軸はN82.5°E 方向を向き、梁間1間、桁行1間の建物である。桁行長2.7m、妻通長2.6m、床面積7.02m²を測る。柱穴は4個を数え、各柱間距離はP1-P2(2.22m)、P1-P3(2.24m)、P2-P4(2.2m)、P3-P4(2.24m)である。各柱穴プランはP1(径38cm×34cm)、P2(径30cm×25cm-27cm)、P3(径38cm×36cm-22cm)、P4(径40cm×30cm)である。

出土遺物 遺物はP3から弥生土器1片を検出した。

SB-08（第25図） 丘陵尾根のはば中央 SB-06の西約15.0mに位置する。長軸はN73.5°E 方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長3.3m、妻通長2.8m、床面積9.



第24図 SB-07実測図



第25図 SB-08実測図

24m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2(2.32m)、P1-P3(1.26m)、P3-P5(1.24m)、P2-P4(1.26m)、P4-P6(1.62m)、P5-P6(2.44m)である。各柱穴プランはP1(径55cm×40cm-53cm)、P2(径33cm-21cm)、P3(径36cm-51cm)、P4(径約35cm-14cm)、P5(径35cm-51cm)、P6(径32cm-37cm)である。

出土遺物 遺物はP3から弥生土器1片を検出した。

SB-09(第26図) 丘陵尾根のやや南側SB-08の南南西約11.0mに位置する。長軸はN7.0°E方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長3.8m、妻通長2.4m、床面積9.12m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2(2.06m)、P1-P3(1.5m)、P3-P5(1.48m)、P2-P4(1.44m)、P4-P6(1.44m)、P5-P6(1.9m)である。各柱穴プランはP1(径53cm×50cm-69cm)、P2(径53cm×43cm-54cm)、P3(径48cm×16cm-61cm)、P4(径46cm×42cm-47cm)、P5(径54cm×50cm-68cm)、P6(径60cm×42cm-41cm)である。

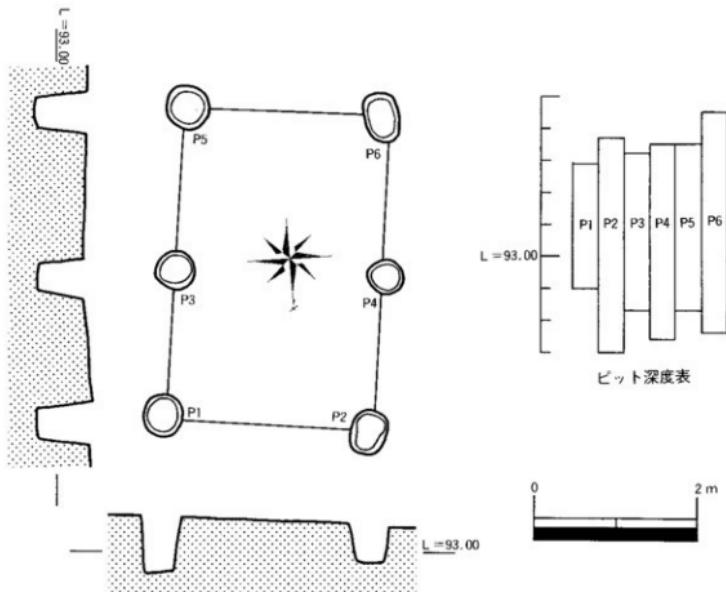
出土遺物 遺物はP4から弥生土器1片を検出した。

SB-10(第27図) 丘陵尾根の南側SB-09の南約5.5mに位置する。長軸はN76.0°E方向を向き、梁間1間、桁行2間の建物である。桁行長4.0m、妻通長2.4m、床面積9.6m²を測る。柱穴は6個を数え、各柱間距離はP1-P2(1.9m)、P1-P3(1.3m)、P3-P5(1.4m)、P2-P4(1.44m)、P4-P6(1.32m)、P5-P6(1.9m)である。各柱穴プランはP1(径55cm×50cm-67cm)、P2(径39cm-54cm)、P3(径58cm×47cm-63cm)、P4(径60cm×58cm-63cm)、P5(径55cm×48cm-49cm)、P6(径51cm×46cm-49cm)である。

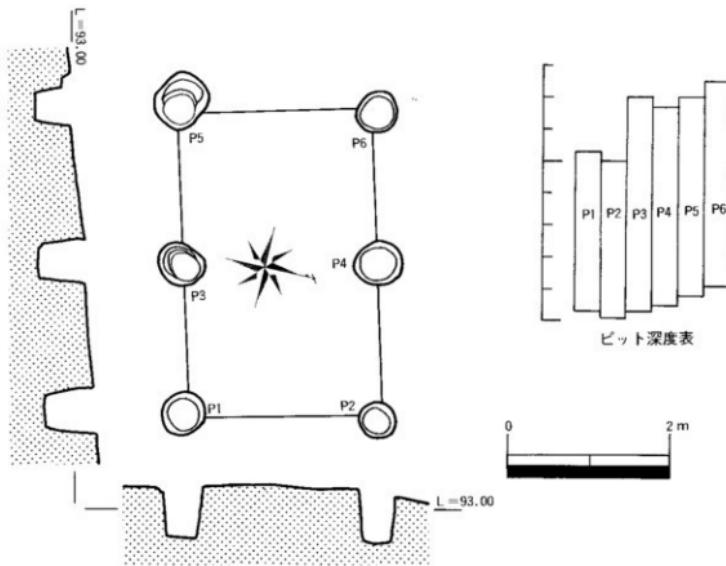
出土遺物 遺物は柱穴内から検出されなかった。

SB-11(第28図) 丘陵尾根のほぼ中央SB-03の東約1.0mに位置する。長軸はN132.5°E方向を向き、梁間1間、桁行1間の建物である。桁行長2.5m、妻通長2.0m、床面積5.0m²を測る。柱穴は4個を数え、各柱間距離はP1-P2(1.72m)、P1-P3(1.94m)、P2-P4(1.92m)、P3-P4(1.76m)である。各柱穴プランはP1(径45cm×43cm-34cm)、P2(径42cm×37cm-33cm)、P3(径44cm-11cm)、P4(径41cm×35cm-22cm)である。

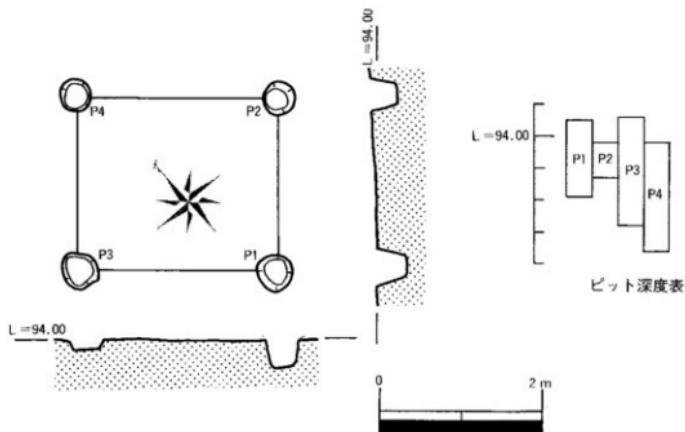
出土遺物 遺物は柱穴内から検出されなかった。



第26図 SB-09実測図



第27図 SB-10実測図



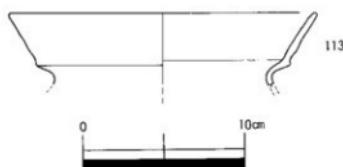
第28図 SB-11実測図

3. 溝状遺構

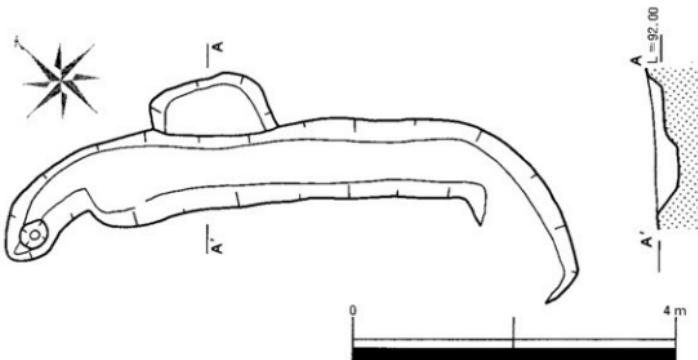
全部で4基検出した。SD-01を除いて調査区外に延びると思われ、一部の調査しか出来なかつたため明確な性格は不明であるが、弥生時代後期の土器に混じって土師器等も出土していることから、周溝墓の可能性も考えられる。

SD-01 (第29図) 丘陵尾根の南側SI-01の西5.0mに位置する。溝は南側を除いて「コ」の字状に残るが、東西方向では僅かに残るのみで、全長8.45m、幅1.0m、深さ0.32mの断面U字形の溝である。溝の外側肩にテラス状に突き出た部分がある。住居跡の可能性も考えられたが、柱穴痕等が全く検出されなかったことから、方形周溝墓の可能性が強いと思われる。

出土遺物 (第30図) 遺物は弥生上器甕 (Na113) を検出した。



第30図 SD-01遺物実測図



第29図 SD-01実測図

SD-02（第31図） 丘陵尾根の南側 SD-01の西22.0mに位置する。西・南側は調査区域外に広がり調査はできなかったが、東側で溝がほぼ消えていることから、南側を除く「コ」の字状の溝と思われる。幅約130cm、深さ60～70cmの断面U字状で底はほぼ平坦な溝である。外側肩にテラス状に突き出た部分が有り、柱穴痕のようなものがあった。北側の溝に165cm×50cm、深さ約30cmの上壌墓状の遺構を検出したことより、方形周溝墓の可能性が強いと思われる。台地状のフラットな面上にも柱穴痕と思われるものを6個検出し性格は不明だが、この方形周溝墓と前後して別の遺構があったと考えられる。

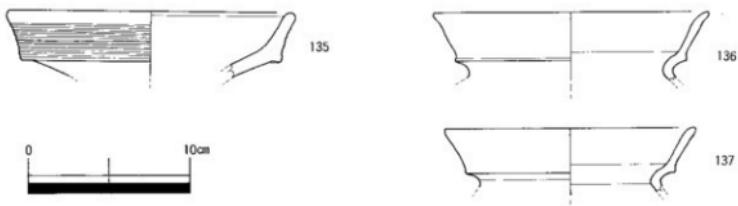
出土遺物（第32・33図） 遺物は弥生土器壺14（No114～127）、弥生土器壺5（No127～132）、弥生土器高杯2（No133・134）、弥生土器器台（No135）、土師器器台（No136）、土師器壺（No137）を検出した。遺物は弥生時代後期のものが多いが、土師器も数点含まれていた。いずれも溝内黒色土中で、底面よりかなり浮いた状態で検出されていることから流れ込みの上器と考えられ、時期を決定づけることは出来ない。周溝内土壌から遺物は検出されなかった。

SD-03（第34図） 丘陵尾根の南側 SI-01の西南西21.0mに位置する。南側が調査区域外に広がり北側に一部しか調査できなかった。推定径6.3mで、黒色土を取り除いて行くと西側に幅1.2m、深さ0.4mの溝を検出した。東側に径約1.5m、深さ0.8mの土壌を検出した。この土壌の中央と思われる部分には、床面をさらに径0.4m、深さ0.2m掘り窪めたピットを検出した。

出土遺物（第35・36図） 遺物は弥生土器壺12（No138～149）、弥生土器壺7（No150～156）、弥生土器高杯（No157）、弥生土器器台3（No158～160）、弥生土器底部2（No161・162）、把手（No163）、土師器壺（No164）を検出した。遺物は弥生時代後期のものが多いが、土師器も検出されていて、正確な時期を決定付けることは出来ない。



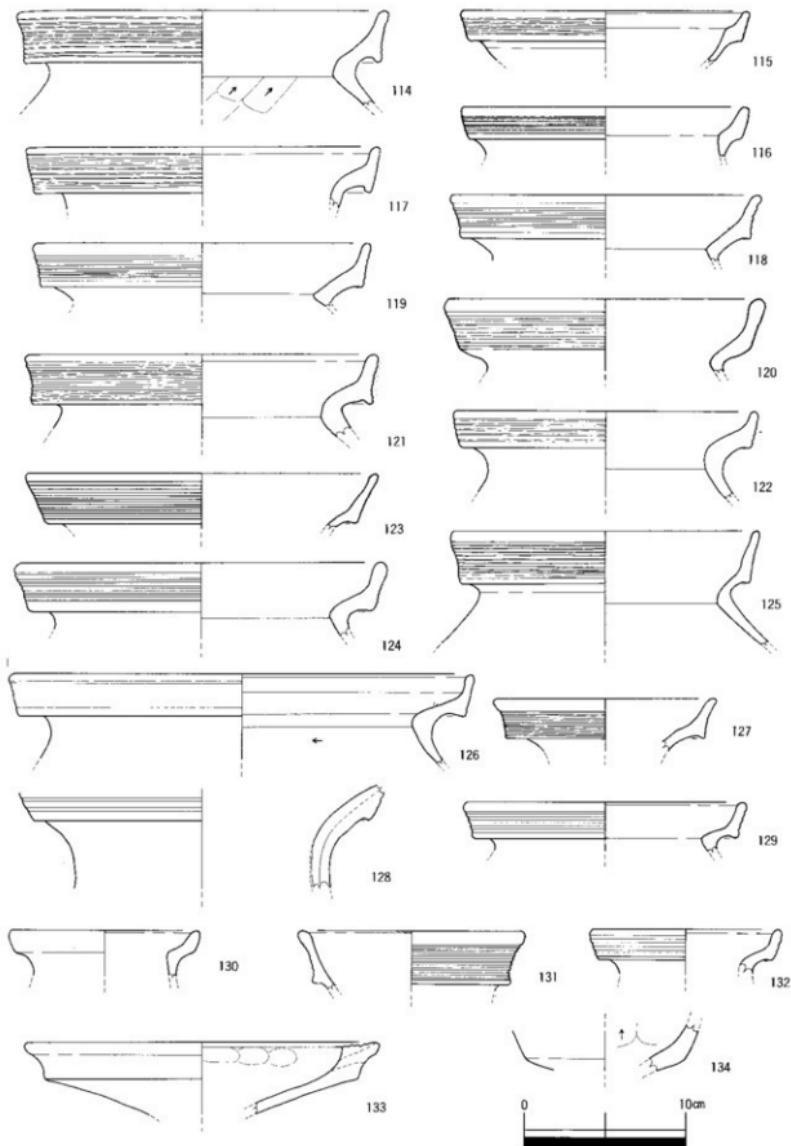
第31図 SD-02実測図



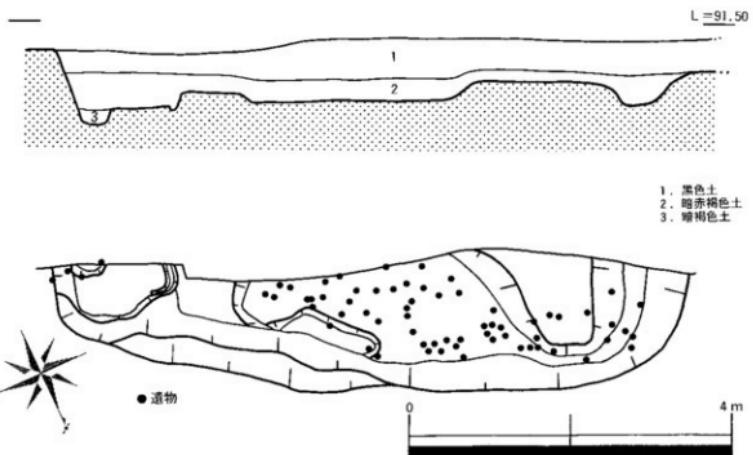
第32図 SD-02遺物実測図(1)

SD-04 (第37図) 丘陵尾根の南側SD-02の東側に隣接して位置する。南側が調査区域外に広がり北側の一部しか調査ができなかった。推定径約5.3mで、幅110cm～140cm、深さ30～57cmの溝が半円状に残り、北西の位置で消滅している。僅かに台地状にフラットな面が残るが、遺構等は検出されなかった。

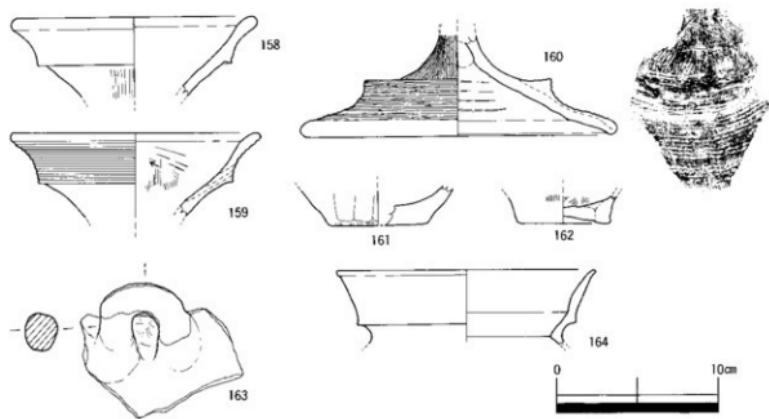
出土遺跡 (第38図) 遺物は溝外側肩のテラス状に突き出した部分より、弥生土器壺 (No165)、溝中より弥生土器壺2 (No165・166)、弥生土器底部 (No168)、弥生土器鉢 (No169) を検出した。



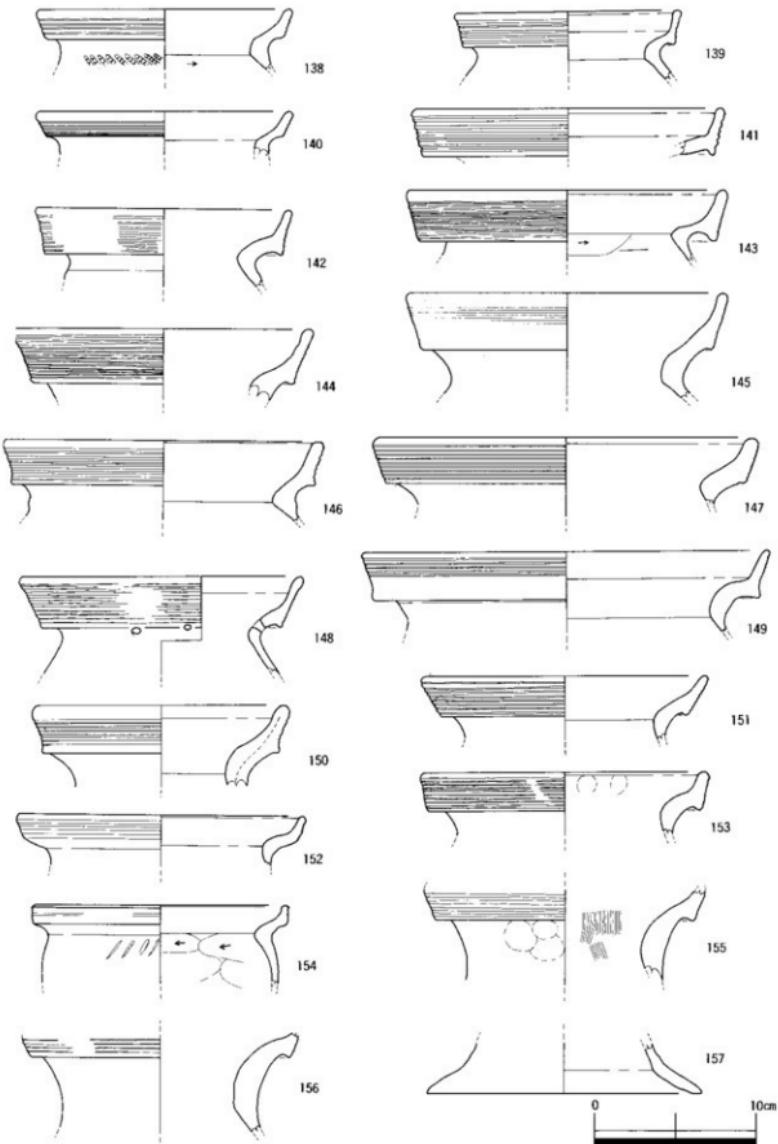
第33図 SD-02遺物実測図(2)



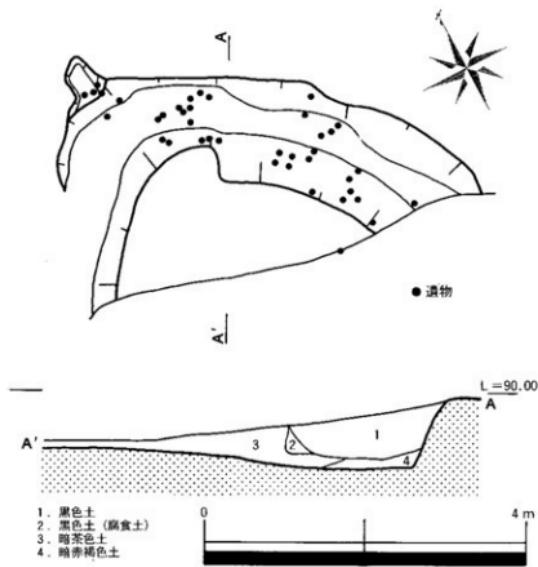
第34図 SD-03実測図



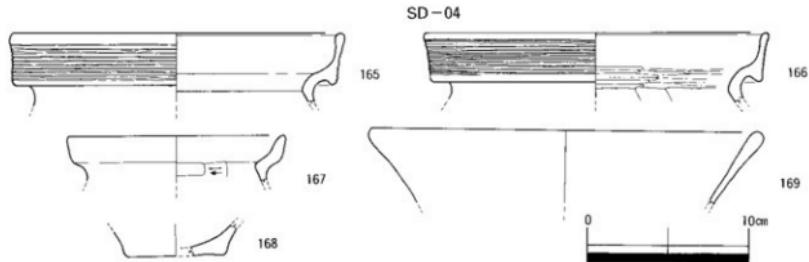
第35図 SD-03遺物実測図(1)



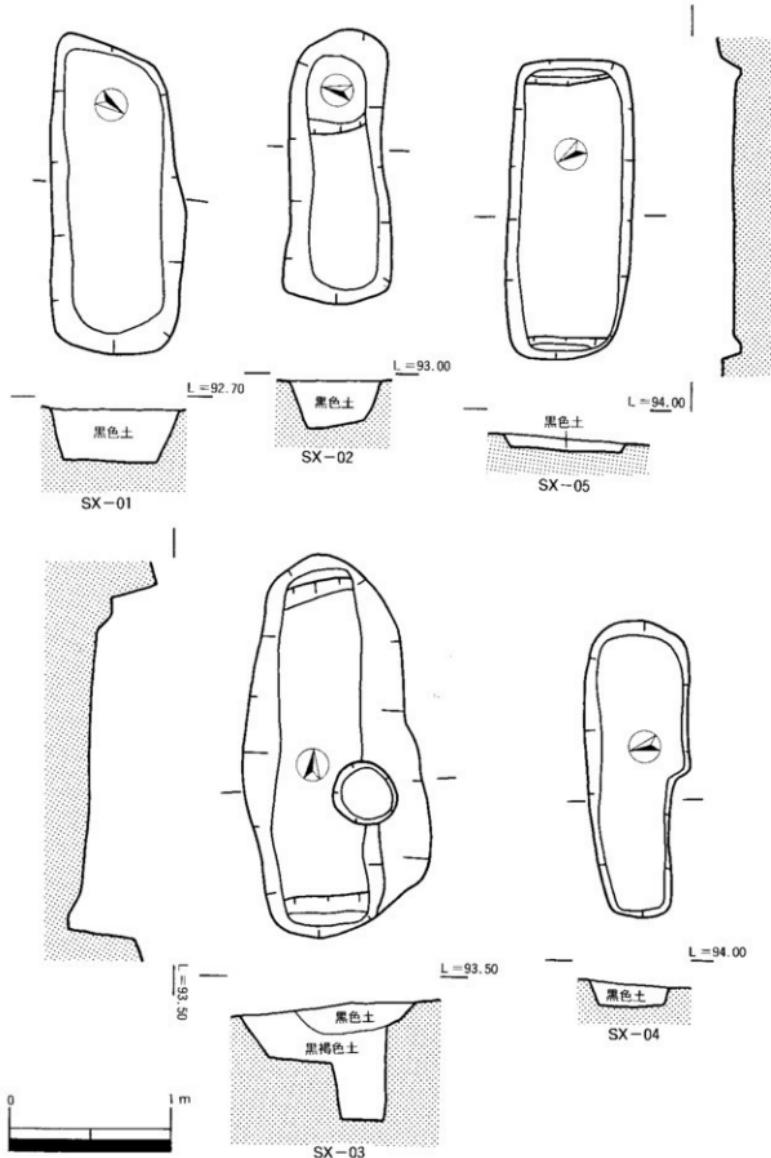
第36図 SD-03遺物実測図(2)



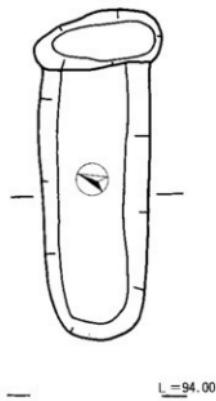
第37図 SD-04実測図



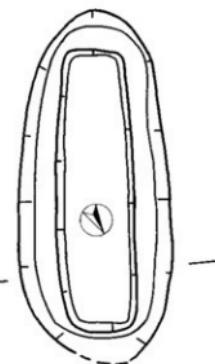
第38図 SD-04遺物実測図



第39図 土壙墓実測図(1)



SX-06



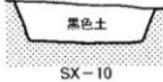
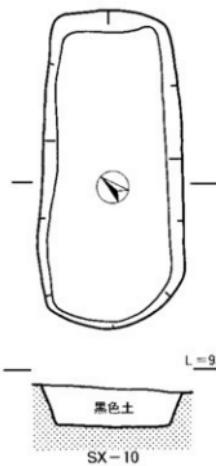
SX-08



SX-07

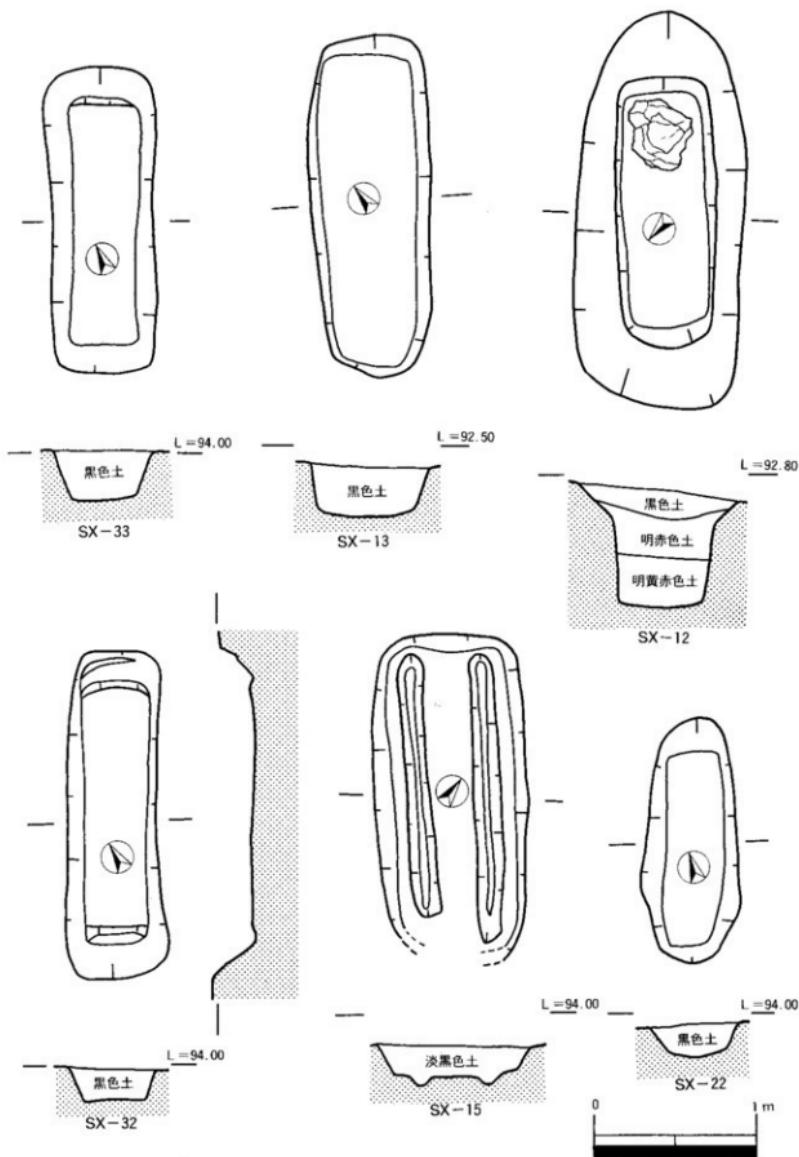


SX-09

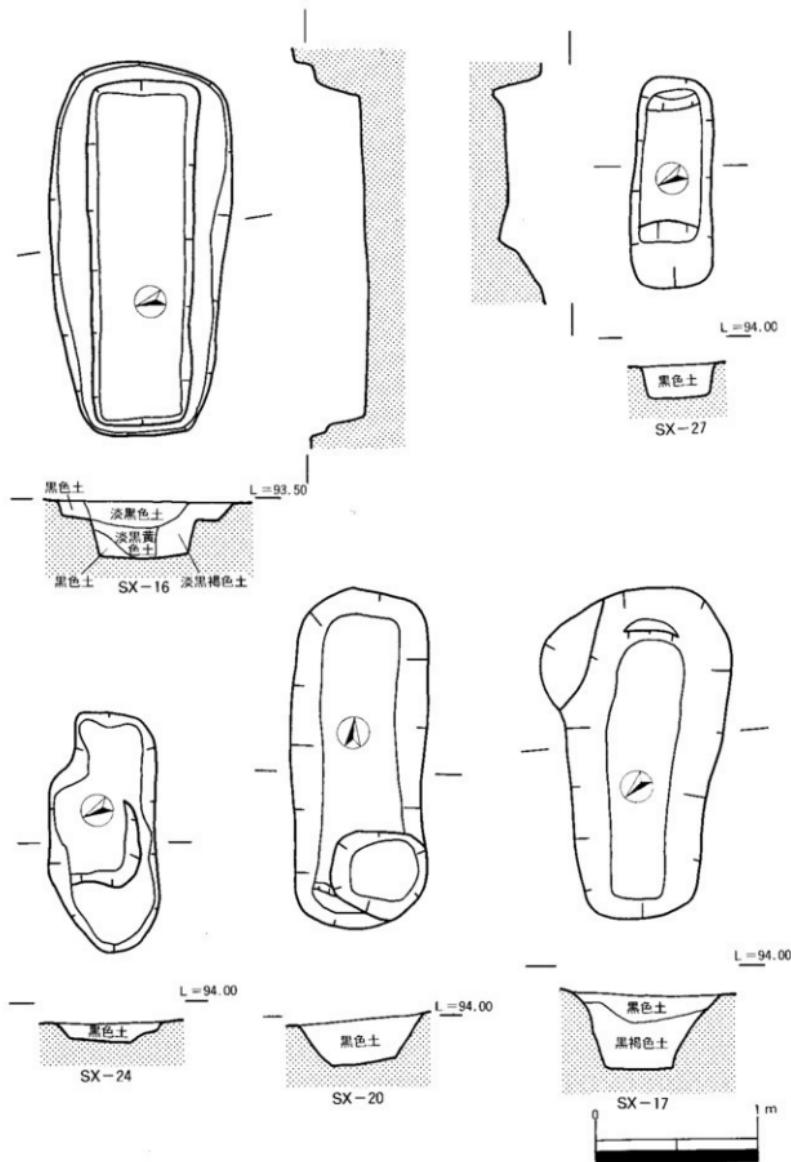


SX-10

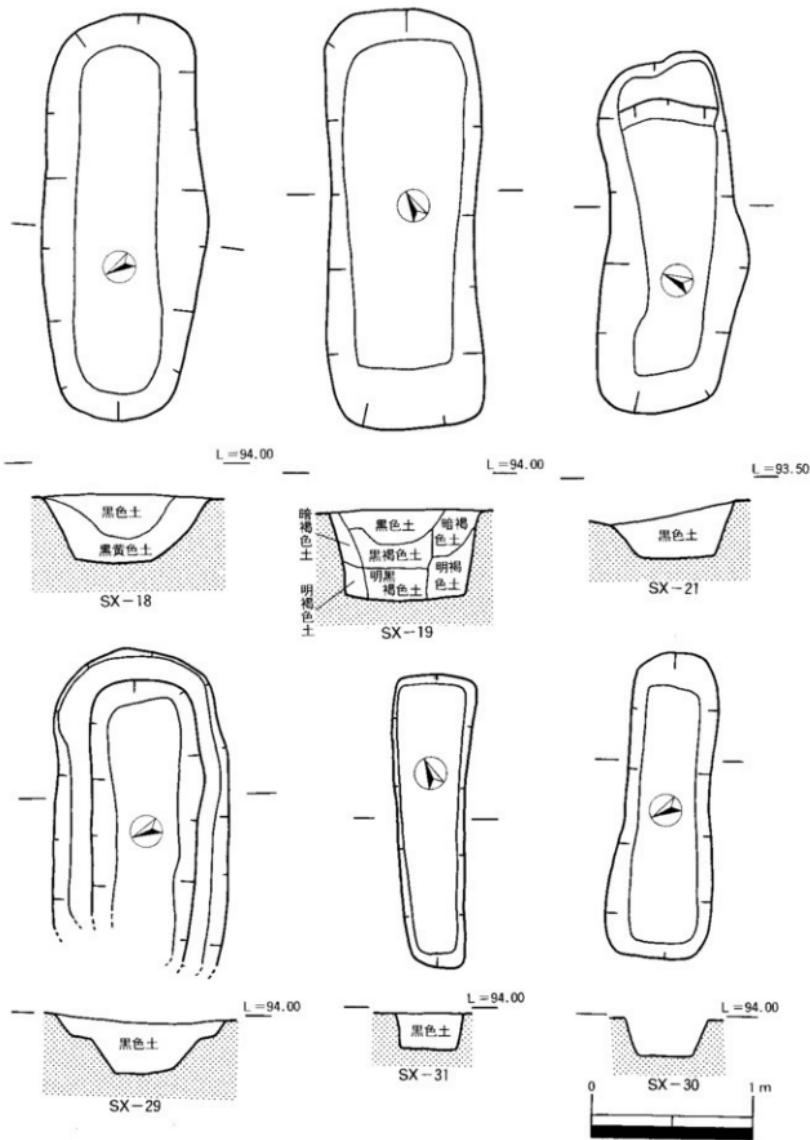
第40図 土壌墓実測図(2)



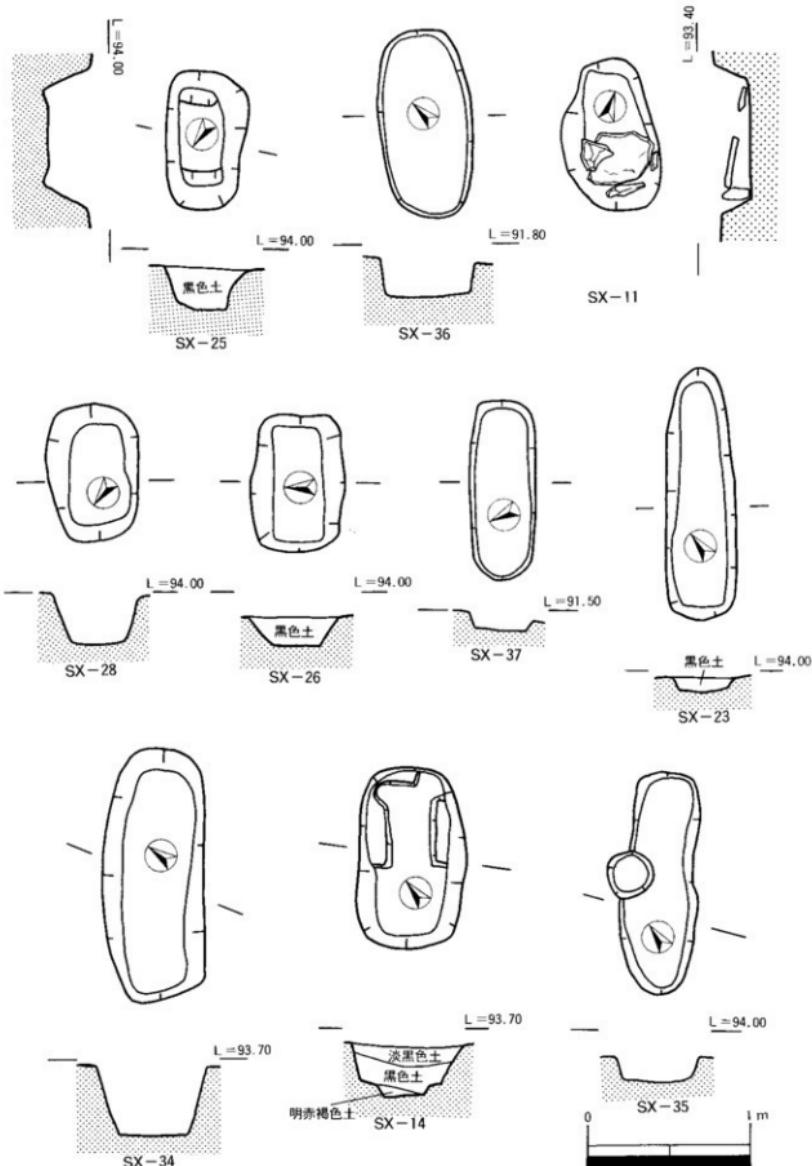
第41図 土壌基実測図(3)



第42図 土壤基実測図(4)



第43図 土壤基実測図(5)

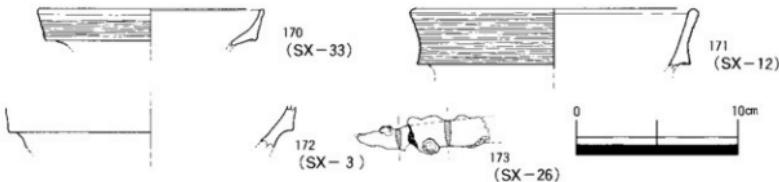


第44図 土壌墓実測図(6)

4. 土塚墓（第39~44図）

全部で37基検出した。SX-03・05・24・27・32・33には小口痕が残り、木棺墓と思われる。SX-08・14・16・29は二段掘りになっている。SX-15には側壁板痕が両側に残る。SX-11・12の中には石が入っていた。SX-12の石は墓標として蓋の上に置かれていたものが落ち込んだと思われるが、SX-11の石については蓋石とも、墓標とも言い難く、その性格は不明である。全体的に見て、規模としては1m前後～2m前後で、方向性も様々で統一性に欠ける。しかしながら、SI-01の西側・SI-02の東側・SI-04の南側付近で比較的集中して検出されていることから、幾つかの集団性があると考えられる。

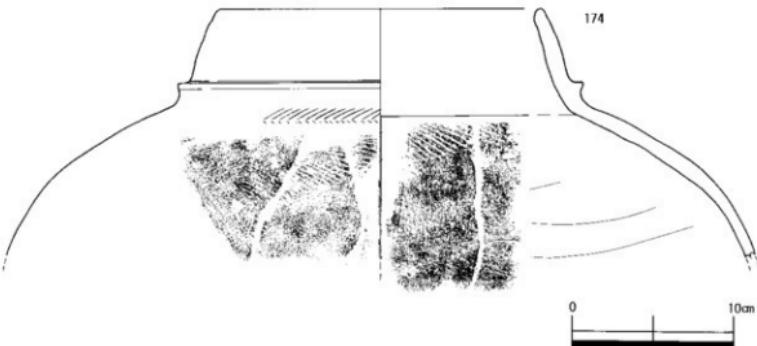
出土遺物（第45図） 遺物の検出された土塚墓は少ないが、SX-03から弥生土器甕（No172）、SX-12から弥生土器甕（No171）、SX-26から刀子（No173）、SX-33から弥生土器甕（No170）を検出した。



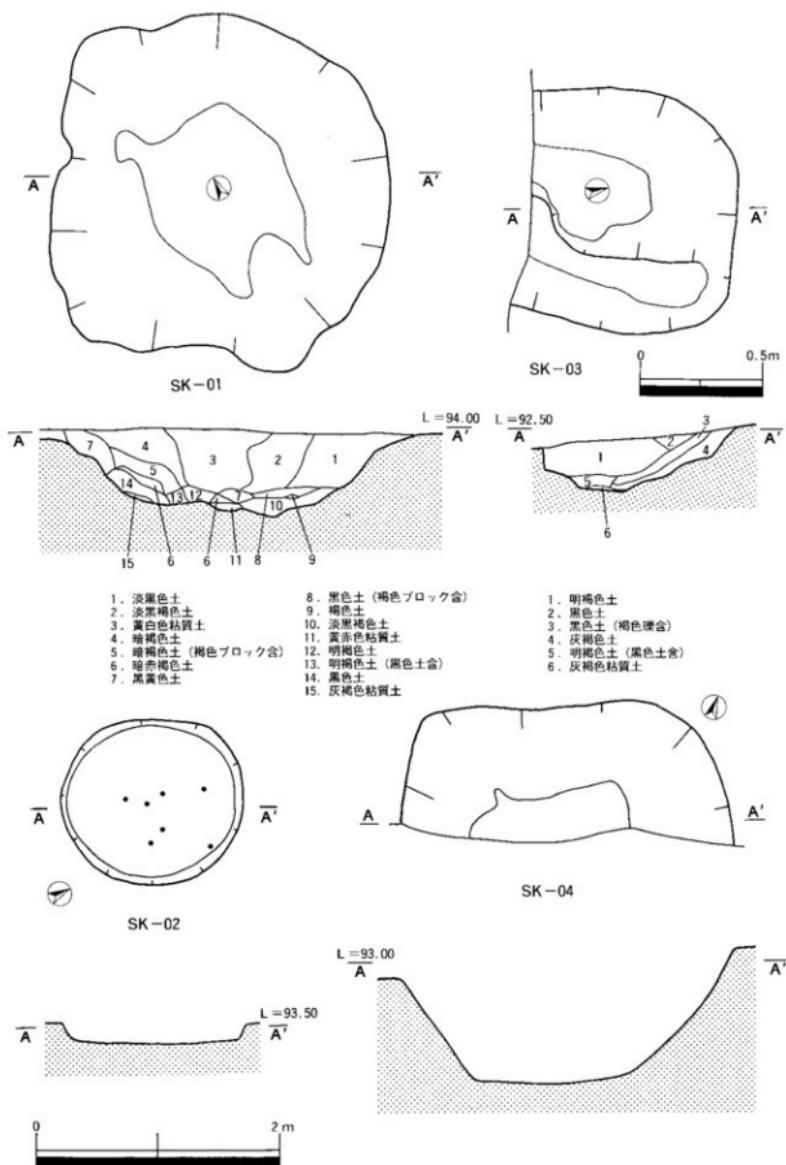
第45図 土塚墓遺物実測図

5. 土塚（第47図）

全部で4基検出した。SK-01・03・04は不整形な土塚である。遺物等は全く検出されなかった。SK-02は150cm×130cm-12cmで、底部は平である。床面より土師器壺片（No174）を検出した（第46図）。黒色土層中より同一器種の破片が検出されていることから、深さはかなりあったと思われる。古墳時代の貯蔵穴の可能性が高い。

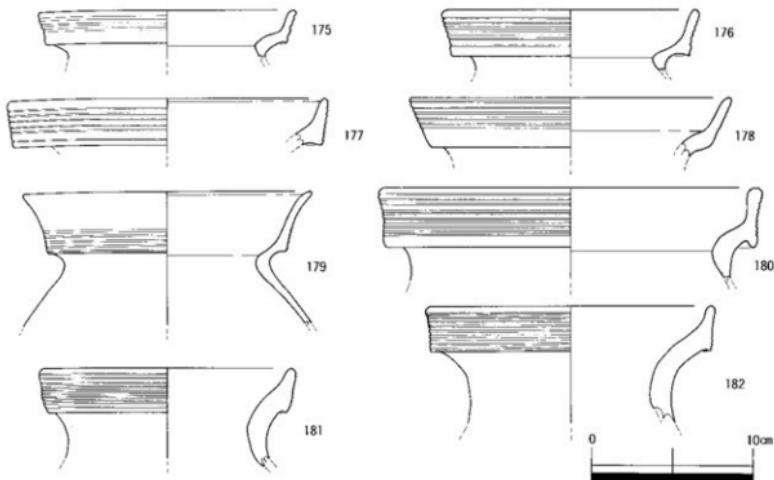


第46図 SK-02遺物実測図



第47図 土壌図

その他



第48図 その他周辺遺物実測図

6. その他

その他周辺の遺物として、弥生土器甕7（№175～181）、弥生土器壺（№182）を検出した（第48図）。時期はいづれも弥生時代後期のものであることから、住居跡等の遺構に関連する遺物と考えられる。

IV. 小 結

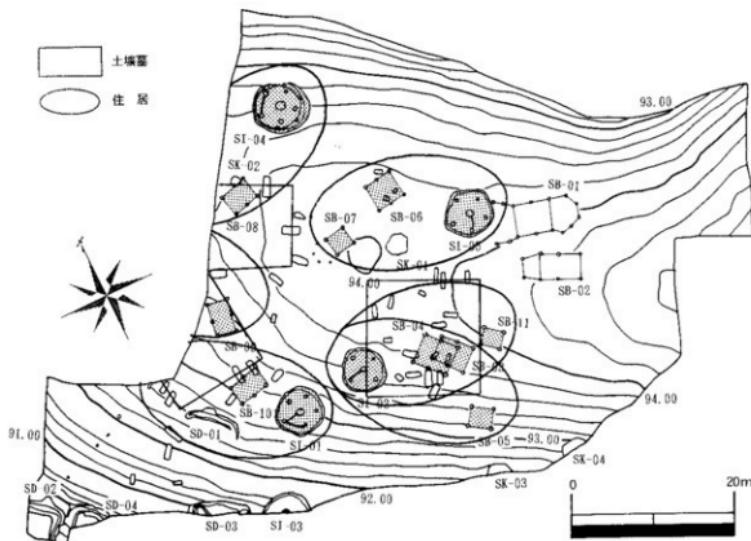
調査の結果、本遺跡は弥生時代後期に栄えた集落遺跡であることがわかった。堅穴住居について見てみると建物自体の切り合いは全くなく、遺物にも時期的には若干の新旧は見られるが、いずれも弥生時代後期のものであることから、多少の前後はあるがほぼ同時期に営まれていたと考えられる。次に掘立柱建物についてみてみると、建物の規模と方向性から、幾つかの集団性がみられる。時期は明確ではないが、周辺の遺物が弥生時代後期の遺物であることから、堅穴住居と同時に営まれたと考えられる。

ここで三つの建物を一単位とする集団を考えることが出来るのではないかだろうか。例えばSI-05を中心としてSB-06・SB-07、SI-02を中心としてSB-03・SB-11とSB-0

4・SB-05というような、竪穴住居を中心とした掘立柱建物1×2間、1×1間の組合せが可能である。SI-01・SI-04についてもそれぞれSB-10・SB-08が近くにあることから、同じような組合せが考えられるものではないだろうか。

また土壙墓についても規模・方向性は異なるが、密集度からみた一つの集団性を考えることが出来そうである。以上のことまとめたのが(第49図)である。

大山西側山麓において、弥生時代のまとまった集落跡の調査を行ったのは今回が初めてであったが、周辺にはまだ集落跡があると考えられている。今回の調査では範囲が不十分で、遺構の性格等不明確な部分が多く遺跡全体の性格を解明できなかったが、今後周辺の調査が行われ、その中で今回の遺跡の性格が明らかになると同時に、大山西側山麓における弥生時代の集落についても明らかになっていくことを期待したい。



第49図 住居及び土壙墓構成図

豎穴式住居址

遺構名	直 径	残存壁高	平面形	柱穴	中央ピット	焼 土	炭
SI-01	6 m	10~51cm	円 形	5 個	60×40cm	有 七力所	有
SI-02	5.10×5.30m	13~35cm	隅丸方 形	4 個	50×80cm	有 二力所	無
SI-03	6 m	60cm	円 形	無	45×30cm	無	無
SI-04 拡張時	0.60×0.58m m	cm	隅丸五角形 椭 圆 形	5 個 6 個		有 一力所	有
SI-05	5.80m	5 cm	五 角 形	5 個	60×75cm	有 一力所	無

掘立柱建物

遺構名	梁間×桁行	妻通長	桁行長	全 長	柱 穴	方 角
SB-01	1間×2間	3.90m	4.40m	11.5m	15個	N108.0° E
SB-02	1間×2間	3.30m	5.20m	7.20m	8個	N115.5° E
SB-03	1間×2間	3.20m	4.00m		6個	N138.5° E
SB-04	1間×2間	3.80m	4.40m		6個	N138.5° E
SB-05	1間×1間	2.60m	2.90m		4個	N124.0° E
SB-06	1間×2間	3.40m	3.70m		6個	N 84.0° E
SB-07	1間×1間	2.60m	2.70m		4個	N 82.5° E
SB-08	1間×2間	2.80m	3.30m		6個	N 73.5° E
SB-09	1間×2間	2.40m	3.80m		6個	N 7.0° E
SB-10	1間×2間	2.40m	4.00m		6個	N 76.0° E
SB-11	1間×1間	2.00m	2.50m		4個	N132.5° E

土壙墓一覧表

遺構名	規模(長さ×幅×深さ)cm	方位	備考
SX-01	192×N79・S67×30	N55.5°E	
SX-02	171×E58・W67×26	N79.5°E	
SX-03	240×N55・S64×30	N0°	両小口
SX-04	188×E58・W40×14	N78.5°W	
SX-05	188×E67・W62×7	N59.5°W	両小口
SX-06	185(208)×E65・W53×23	N69°E	
SX-07	185×E60・W54×8	N65.5°W	
SX-08	220×E81・W71×9 180×E43・W38×22	N28.5°E	二段掘り
SX-09	182×E79・W82×11	N21.5°E	
SX-10	200×E75・W87×20	N46.5°E	
SX-11	95×E57・W35×20	N18°W	石有り
SX-12	248×E56・W56×75	N41.5°W	石有り
SX-13	215×N64・S55×28	N37°E	
SX-14	113×N54・S61×23 -×N30・S-×5	N39.5°E	二段掘り
SX-15	(205)×E86・W83×15	N37°W	側壁痕有り幅0.43m
SX-16	235×E101・W81×10 214×E68・W60×22	N73.5°W	二段掘り
SX-17	205×E(90)・W69×40	N45°W	
SX-18	250×E91・W76×33	N62°W	
SX-19	270×N95・S96×55	N30°E	
SX-20	215×N78・W(80)×28	N0°	
SX-21	220×N71・S80×26	N63.5°E	
SX-22	153×N50・S54×15	N16.5°E	
SX-23	158×N28・S42×8	N38.5°E	
SX-24	150×E46・W(65)×6	N65.5°W	両小口
SX-25	87×N44・S40×26	N36°W	
SX-26	85×E49・W49×16	E0°	刀子
SX-27	133×E43・W50×20	N64.5°W	両小口
SX-28	85×N44・S47×30	N42.5°W	
SX-29	(225)×E99・S-×10 (190)×E62・W(57)×16	N66°W	二段掘り
SX-30	191×E52・W61×24	N62°W	
SX-31	182×N50・S34×22	N24.5°E	
SX-32	205×N53・S64×20	N27.5°E	両小口
SX-33	191×N69・S63×30	N22.5°E	北側小口
SX-34	158×N51・S53×42	N56.5°E	
SX-35	140×N36・S36×10	N39°E	
SX-36	118×N45・S44×20	N40°E	
SX-37	112×E34・W36×10	N66°W	

遺物観察表 1

種類	法 量 (cm)	特徴	色調	胎	土	燒成	備考
1 麦	(13.8) 3.8(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。 外口縁部に4条の平行沈線を施す。	褐色	緻密・硬い	良 好	(鑑定) 1/6	
2 麦	(15.2) 4.4(胎)	外表面口縁部に4条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	赤褐色	0.5~1mmの白色砂粒を少量含む	普 通	(鑑定) 7/8	
3 麦	(15.4) 4.0(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。 外口縁部に4条の平行沈線を施す。	淡褐色	緻密・硬い	良 好	(鑑定) 1/5	
4 麦	(15.6) 4.5(胎)	外表面口縁部に4条の平行沈線を施す。	淡褐色	密	普 通	(鑑定) 1/10	
5 麦	(17.6) 3.7(胎)	外表面口縁部に3~4条の平行沈線を施す。	褐色	密	良 好	(鑑定) 1/4	
6 麦	(17.8) 2.7(胎)	内外表面共に焼調整を施す。	褐色	1~3mmの砂粒を含む	普 通	(鑑定) 1/12	
7 麦	(17.4) 3.3(胎)	外表面口縁部に不明瞭な部分があるが7条の浅い沈線を施す。	青褐色	密	普 通	(鑑定) 1/10	
8 麦	(20.0) 3.0(胎)	外表面口縁部に10条の平行沈線を施す。	褐色	密	普 通		
9 麦	(18.0) 2.8(胎)	外表面口縁部に9条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	褐色	密	良 好	(鑑定) 1/4	
10 瓶	(13.6) 3.7(胎)	外表面口縁部に4条の平行沈線を施す。	淡褐色	密	普 通	(鑑定) 1/6	
11 瓶	(14.2) 6.9(胎)	外面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。外面口縁部に9条の平行沈線を施す。肩部に側突尖を施す。	青褐色	密	良 好	(鑑定) 1/2	
12 瓶	(15.4) 5.0(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。 外表面口縁部に6条の平行沈線を施す。	褐色	密・2~3mmの砂粒を多く含む	良 好	(鑑定) 1/8	
13 瓶	(21.4) 7.5(胎)	内外表面共に撫を施す。外面口縁部2条の平行沈線を施す。	褐色	砂粒少々含む	普 通	(鑑定) 1/7	
14 瓶	(9.4) 4.5(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面は褐色土付着の為調整不明。外面丹塗り。	青褐色	密	良 好	(鑑定) 1/6	
15 瓶	16.4 11.5	一部へラ磨きがみられるが、内外表面共に不正方向の撫調整を施す。	褐色	密	普 通	(鑑定) 3/4	
16 瓶	19.0 10.2(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。	茶褐色	0.5~2mmの砂粒をやや多く含む	やや不良	(鑑定) 1/4	
17 高环	(20.5) 3.6(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、他不明。外面丹塗り。	赤褐色	1mmの砂粒を含む	普 通	(鑑定) 1/12	
18 高环	(19.6) 5.7(胎)	内外表面に黒色土付着の為調整不明。	青褐色	1~2mmの砂粒を少々含む	不 良	(鑑定) 1/2	
19 高环	(胎) 7.0 9.3	脚部は縱方向へのラ痕さ、脚部は撫調整を施す。	青褐色	1~2mmの砂粒をやや多く含む	やや不良		
20 高部	(胎) 3.5 (6.0)	外面底部を調整、ハケ目調整、内面撫調整を施す。	淡褐色	1mmの砂粒を少量含む	良 好	(鑑定) 1/4	
21 高部	(胎) 3.2 (4.5)	外面底部を調整、ハケ目調整、内面撫調整を施す。	淡褐色	1mmの砂粒を少量含む	良 好	(鑑定) 1/5	
22 把 手	13.2 4		青褐色				
23 小玉		0. 1 g ガラス	青 色				
24 石 織		8. 15 g 黒曜石					
25 麦	14.6 2.4(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。 外表面口縁部に4条の平行沈線を施す。	赤褐色	1mmの砂粒少々含む	普 通	(鑑定) 1/6	
26 麦	15.6 2.4(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に4条の平行沈線を施す。	淡褐色	1mmの砂粒少々含む	普 通	(鑑定) 1/12	
27 麦	15.6 2.2(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に9条の平行沈線を施す。	黑褐色	0.5~1mmの砂粒多く含む	普 通	(鑑定) 1/12	
28 麦	17.0 3.5(胎)	外表面及び内面口縁部を調整、内面他削りを施す。 外表面口縁部は消耗しているが、2条の平行沈線が残る。外面に炭化物付着。	淡褐色	0.5mmの砂粒を多く含む	普 通	(鑑定) 1/6	
29 麦	(15.6) 2.9(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に約10条の平行沈線を施す。	褐色	緻密・2~3mmの砂粒を多く含む	良 好	(鑑定) 1/12	
30 麦	(17.8) 2.6(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に7条の平行沈線を施す。	淡褐色	緻密・硬い・0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(鑑定) 1/12	
31 麦	15.6 3.0(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に9条の平行沈線を施す。	褐色	1mmの砂粒外面に多く含む	普 通	(鑑定) 1/10	
32 麦	19.6 3.5(胎)	内外表面共に撫調整を施す。内面他削りを施す。 外表面口縁部に8条の平行沈線を施す。	褐色	0.5~1mmの砂粒をやや多く含む	良 好	(鑑定) 1/6	
33 麦	(15.4) 4.0(胎)	内外表面共に撫調整を施す。外表面口縁部に8条の平行沈線を施す。	淡褐色	緻密・硬い・1~2mmの砂粒を多く含む	良 好	(鑑定) 1/6	

遺物観察表2

種類	法量(cm)			特徴	色調	胎土	焼成	備考
	口径	高さ	底径					
甕	22.5	4.2(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に6条の平行沈線が若干重んで施される。	濃褐色	密・0.5~1mmの砂粒を多く含む	良 好	(山形県) 1/12
壺	15.6	9.5(附輪)		外面白口縁部に4条の平行沈線、肩部に刺突紋を施す。	褐色	0.5~1mmの砂粒少々含む	普 通	(山形県) 5/6
壺	9.4	4.3(附輪)		内外面共に施調整を施す。	黒褐色	1mmの砂粒を少々含む	良 好	(山形県) 1/5
壺	11.6	2.5(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に2条一単位、2ヶ所に平行沈線を施す。	濃褐色	1mmの砂粒少々含む	普 通	(山形県) 1/8
壺	(17.4)	5.7(附輪)		外面白口縁部に約6条の平行沈線を施す。	褐色	密	良 好	(山形県) 1/5
壺		6.7(附輪)		外表面及び内面白口縁部施調整、内面部削りを施す。外面白口縁部に9条の平行沈線が残る。口縁部欠損。	濃褐色	1~2mmの砂粒を多く含む	普 通	(山形県) 1/5
壺	(17.4)	5.0(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に7条の平行沈線を施す。	褐色	密	良 好	(山形県) 1/5
壺	15.2	4.3(附輪)		外面白口縁部は剥離の為施調整不明。他施調整。内面白口縁部は削り跡、他削りを施す。	濃褐色	砂粒少々含む	普 通	(山形県) 1/12
壺	19.0	4.5(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に9条の平行沈線を施す。	褐色	0.5 mmの砂粒を少々含む	普 通	(山形県) 1/6
器 白		3.0(附輪)		外面白口縁部及び内面白口縁部、外面部は削りを施す。口縁部欠損。	褐色	密・0.5~1mmの砂粒を多く含む	良 好	(青森) 1/10
器 台	19.5	2.2(附輪)		内外面共に施調整を施す。	黄褐色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	良 好	(青森) 1/12
底 部				外表面施調整、内面へ削りを施す。	褐色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	良 好	(青森) 1/6
吉 吉				径3.4 cm	赤褐色	1mmの砂粒を少々含む	普 通	
唐 洋				長3.7.8 cm・幅3.1 cm				
甕	(15.6)	2.8(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に8条の平行沈線を施す。	茶褐色	密	良 好	(山形県) 1/14
甕	(19.3)	3.6(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に10条の平行沈線を施す。	黒褐色	密・1mmの砂粒を少々含む	良 好	(山形県) 1/8
甕	(16.5)	4.5(附輪)		外表面及び外面白口縁部施調整、内面部削りを施す。外面白口縁部に13条の平行沈線を施す。	茶褐色	密・0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(山形県) 1/2
甕	(19.3)	4.2(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に10条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5 mmの砂粒を少々含む	普 通	(山形県) 1/12
甕	15.0	7.0(附輪)		外表面及び内面白口縁部施調整、内面部削りを施す。外面白口縁部に3条の凹線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	普 通	(山形県) 1/4
器 台	13.8	3.7(附輪)		内外面共に施調整を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	やや悪い	(青森) 1/4
底 部	(附輪)4.7	(3.5)		外表面施調整を施す。内面調整不明。	茶褐色	1~2mmの砂粒をやや多く含む	普 通	(青森) 1/6
底 部	(附輪)1.6	3.3		外面部底部に指捺压痕、他ハケ目調整を施す。内面調整不明。	青茶色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	普 通	(青森) 9/10
底 部	(附輪)3.0	5.1		外面部底部施調整及び指捺压痕、他ハケ目調整を施す。内面部指捺压痕残り、他施調整を施す。	青茶色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	良 好	底部完形
壺	(13.6)	4.0(附輪)		古式土器師・外表面及び内面白口縁部施調整、内面部削りを施す。外面白口縁部にへら書き線を波状に施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	普 通	(山形県) 2/5
器 台	(20.5)	7.5(附輪)		土器師・内面部削り、他内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に3条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少々含む	普 通	(青森) 2/5
器 台	(21.2)	6.0(附輪)		土器師・内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に3条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒をやや多く含む	良 好	
坏	11.7	3.0(附輪)		痕跡器・内外面共に施調整を施す。	暗灰色	密	普 通	(山形県) 1/10
甕	(11.4)	2.3(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に4条の平行沈線を施す。	茶褐色	緻密・破い	良 好	(山形県) 1/8
甕	(9.6)	3.4(附輪)		外表面及び内面白口縁部施調整、内面部削りを施す。外面口縁部に7条の平行沈線を施す。	褐色	緻密・硬い	良 好	(山形県) 1/4
甕	(13.4)	4.3(附輪)		内外面共に施調整を施す。外面白口縁部に7条の平行沈線を施す。	赤茶色	密・軟質	普 通	(山形県) 1/6

遺物觀察表3

種類	口径	器高	底径	法量(cm)	特徴		色調	胎	土	燒成	備考
					外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面に粗面剥離著しいが、4条の平行沈線が残る。外面に粗面あり。	白					
64 虹	(13.6)	5.0(粗)					白	粗	1~2mmの砂粒と 雲母少量含む	良	好 (回転炉) 1/6
65 虹	(15.8)	2.4(粗)			外表面口縁部に7条の平行沈線を施す。	淡褐色	白	良	好 小片		
66 虹	(15.6)	3.7(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面口縁部に6条の平行沈線を施す。	赤茶色	軟質・2mmの砂粒 を多く含む	不	良 (回転炉) 1/6		
67 虹	(15.8)	5.2(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に沈線が残るが 痕跡の為不明瞭。肩部に長縫状を施す。	茶色	0.5~1mmの砂粒を 少量含む	良	好 (回転炉) 1/8		
68 虹	(17.4)	4.2(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に10条の平行沈 線を施す。	まき毛	粗密・1~3mmの砂粒 を多く含む	良	好 (回転炉) 1/8		
69 虹	16.0	4.4(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に6条の平行沈線、肩部に目録列点状を施す。	暗褐色	極細白色砂粒を少 量含む	良	好 (回転炉) 1/2		
70 虹	17.4	5.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に9条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	1~2mmの砂粒を 少量含む	やや不良	(回転炉) 5/8		
71 虹	17.8	5.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に7条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を 少量含む	良	通 (回転炉) 1/4		
72 虹	19.2	5.2(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に6条の平行沈 線、肩部に長縫状を施す。	赤褐色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好 (回転炉) 1/2		
73 虹	(16.6)	5.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に7条の平行沈線、肩部に列点状を施す。	茶褐色	1mmの白色砂粒を 少量含む	良	通 (回転炉) 1/1		
74 虹	(19.5)	5.5(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に10条の平行沈線、肩部に目録列点状を施す。	赤茶色	0.5~1mmの砂粒を 多く含む	良	好 (回転炉) 1/8		
75 虹	19.6	5.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に6条の平行沈線を施す。外面に黒斑り。	褐	1mmの砂粒を 多く含む	良	好 (回転炉) 1/5		
76 虹	(19.4)	4.8(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に6条の平行沈 線を施す。外面に炭化物付着。	赤褐色	粗密・1~2mmの砂粒 を多く含む	良	好 (回転炉) 1/12		
77 虹	(19.4)	4.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に5条の平行沈線、肩部に目録列点状を施す。	暗褐色	粗密・硬い・1~3mm の砂粒少量含む	良	好 (回転炉) 1/12		
78 虹	22.0	2.5(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に沈線が痕跡が 残りが痕跡の為不明瞭である。外面に炭化物付着。	褐	1~2mmの砂粒を 少量含む	不	良 (回転炉) 1/12		
79 虹	21.0	4.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に7条の平行沈線、肩部に列突状を施す。外表面 に炭化物付着。	まき毛	粗密・1~3mmの砂粒 を多く含む	良	通 (回転炉) 1/18		
80 虹	(21.6)	3.0(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に5条の平行沈 線を施す。	褐	粗・2~3mmの砂 粒を多く含む	不	良 (回転炉) 1/8		
81 虹	(19.4)	5.8(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に10条の平行沈 線を施す。	赤茶色	粗密・硬い・2~3mm の砂粒を多く含む	良	好 (回転炉) 1/4		
82 虹	(23.2)	5.0(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に8条の平行沈線を施す。	赤褐色	0.5~2mmの砂粒を 少量含む	良	好 (回転炉) 1/10		
83 竜	(11.6)	3.2(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に4条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	明茶色	粗密・2~3mmの砂 粒を多く含む	良	好 (回転炉) 1/5		
84 竜	(15.5)	2.6(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に不明瞭な沈線 が残る。	赤茶色	1mmの白色砂粒を やや多く含む	やや不良	(回転炉) 1/12		
85 竜	(25.6)	3.6(粗)			内外面共に痕跡の為調整不明、外面に丹張りを施す。	淡褐色	白	良	好 (回転炉) 1/10		
86 竜	(16.0)	3.3(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に沈線が残るが 痕跡の為不明瞭である。	淡褐色	白	良	好 (回転炉) 1/8		
87 竜	(15.4)	4.6(粗)			内外面共に施調整を施す。	黑褐色	白・軟質・2~3mm の砂粒を多く含む	良	通 (回転炉) 1/12		
88 竜	18.0	4.9(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外面に炭化物付着。 口縁部に8条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	淡褐色	1mmの砂粒を少量 含む	やや不良	(回転炉) 1/10		
89 竜	(15.4)	4.9(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に7条の平行沈線、肩部に列点状を施す。 外表面口縁部の為調整不明。	白	粗密・硬い・2~3mm の砂粒を多く含む	良	好 (回転炉) 1/10		
90 竜	(17.5)	2.3(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に焼失著しく不 明瞭だが、沈線が残る。	褐	粗密・硬い・2~3mm の砂粒を多く含む	良	通 (回転炉) 1/14		
91 竜	17.6	8.5(粗)			外表面及び内面口縁部調整、内面削りを施す。外表面 口縁部に6条の平行沈線、肩部に列点状を施す。	淡褐色	1~3mmの砂粒を 少量含む	やや不良	(回転炉) 1/4		
92 竜	(17.4)	4.0(粗)			内外面共に施調整を施す。	まき毛	1~3mmの砂粒を多く 含む	良	通 (回転炉) 1/8		
93 竜	(17.2)	4.4(粗)			内外面共に施調整を施す。外表面口縁部に7条の平行沈 線を施す。	赤褐色	粗密・硬い	良	好 (回転炉) 1/10		

遺物観察表4

種類	口徑	器高	底径	特徴	色調	胎	土	焼成	備考	
									(目録番)	1/3
94 痕				外面無調整、内面削りを施す。外面部から肩部に8条の縦書き沈線を施す。口縫部欠損。	赤褐色 含む	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(目録番)	1/3
95 痕	(18.0)	3.0(鉛錆)		内外面共に無調整を施す。外面部縁部に沈線が残るが不明瞭である。	褐色	1mmの砂粒を少量 含む	普通	通	(目録番)	1/3
96 痕	24.2	8.1(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。風化のため不明瞭だが、外面部縁部及び肩部に平行沈線が残る。	淡褐色	0.5~3mmの砂粒を やや多く含む	良	好	(目録番)	1/6
97 花	(13.2)	4.3(鉛錆)		内外面共に無調整で、内面口縁部に指頭圧痕が残る。	暗褐色 内面 黄色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(目録番)	1/8
98 花	(15.4)	4.8(鉛錆)		内外面共に無調整で、内面口縁部に僅かに指頭圧痕が残る。	青褐色 内面 黄色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(目録番)	1/3
99 花	15.0	7.2(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、外面部僅かに削りが残る。	青褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を 少量含む	良	好	(目録番)	1/6
100 花 部	(鉛錆)2.3	(5.2)	内外面共に焼耗の為調整不明。外面一部黒色。	褐色	0.5~3mmの砂粒を やや多く含む	普通	(鉛錆)	1/2		
101 武 部	(鉛錆)3.5	5.4	0.5~1mmの砂粒を少量含む	褐色	0.5~1mmの砂粒を 少量含む	良	好	(鉛錆)	1/4	
102 武 部	(鉛錆)3.7	6.0	外面無調整、内面削りを施す。	暗褐色 内面 黄色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(鉛錆)	1/4	
103 武 部	(鉛錆)3.0	7.6	外面無調整、内面削りを施す。	暗褐色 内面 黄色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(鉛錆)	1/6	
104 肥 手				炭化物付着。肥手付き痕。	褐色	1~1mmの白色砂 粒を少量含む	良	好		
105 石 器				4.30g						
106 痕	(25.3)	6.4(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面上縁部に10条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	暗褐色 内面 黄色	緻密・硬い	良	好	(目録番)	1/1
107 痕	(19.7)	5.0(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に8条の平行沈線を施す。肩部に剥落跡を残す。外面部に丹塗りを施す。	褐色	緻密・硬い	良	好	(目録番)	1/1
108 痕	(15.6)	4.4(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。	褐色	良	好	(目録番)	1/1	
109 武 部	(鉛錆)2.9	3.3	外面部調整、内面削りを施す。	青褐色 内面 黄色	良	好	(鉛錆)	1/4		
110 花	(15.0)	3.0(鉛錆)		内面共に無調整を施す。	暗褐色 内面 黄色	良	好	(目録番)	1/8	
111 痕		2.9(鉛錆)		外面共に無調整を施す。外面口縁部に3条の平行沈線が残る。口縫部欠損。	青褐色 内面 黄色	緻密・1~2mmの 砂粒を多く含む	良	好	(目録番)	1/1
112 痕	(17.2)	4.9(鉛錆)		外面共に無調整を施す。外面口縁部に8条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	1~1.5mmの砂粒含 む	良	好	(目録番)	1/3
113 痕	(19.0)	4.5(鉛錆)		唐轍者しく調整不明。無による突端を施す。	青褐色 内面 黄色	不 良			(目録番)	1/1
114 痕	(22.6)	6.0(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を 少量含む	普通	(目録番)	1/8	
115 痕	(17.7)	3.0(鉛錆)		外面共に無調整を施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	1~1.5mmの砂粒含 む	良	好	(目録番)	1/12
116 痕	(17.5)	3.9(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に不明瞭な7条の平行沈線が残る。	青褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を 含む	良	好	(目録番)	1/1
117 痕	(21.5)	3.9(鉛錆)		内面共に無調整を施す。外面口縁部に8条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	1mmの砂粒を少量 含む	良	好	(目録番)	1/3
118 痕	(19.0)	4.0(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に6条の平行沈線を施す。	暗褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を 含む	良	好	(目録番)	1/8
119 痕	(20.6)	4.0(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に4条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を少 量含む	普通	(目録番)	1/10	
120 痕	(19.3)	4.5(鉛錆)		内面共に無調整を施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	良	好	(目録番)	1/8	
121 痕	(21.5)	5.0(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に9条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	良	好	(目録番)	1/10	
122 痕	(18.4)	5.5(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に5条の平行沈線を施す。	暗褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を 含む	良	好	(目録番)	1/10
123 痕	(21.6)	3.3(鉛錆)		内面共に無調整を施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	1mmの砂粒をやや 多く含む	普通	(目録番)	1/6	
124 痕	(22.3)	4.6(鉛錆)		外面及び内面口縁部無調整、内面削りを施す。外面口縁部に13条の平行沈線を施す。	青褐色 内面 黄色	0.5~1mmの砂粒を含 む	良	好	(目録番)	1/12

遺物觀察表 5

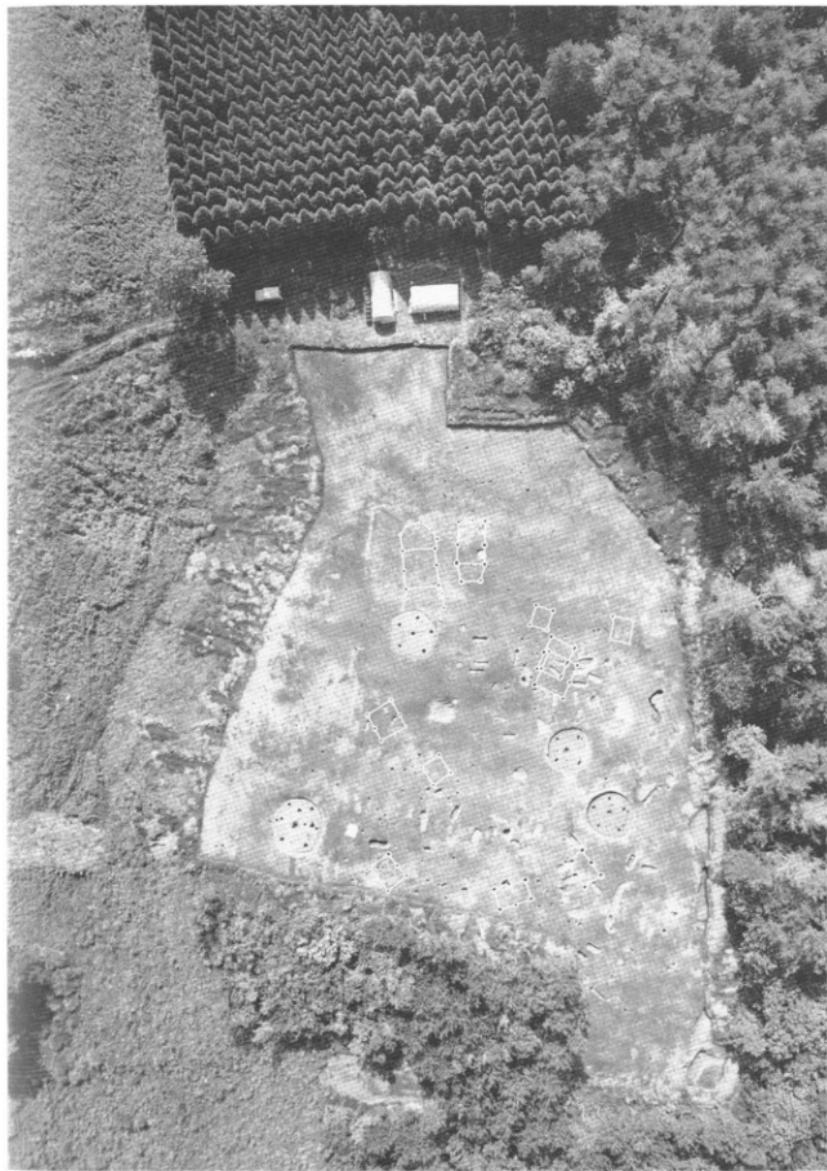
種類	法量 (cm)		特徴	色調	胎	土	焼成	備考
	口径	高さ						
甌	(19.0)	7.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に12条の平行沈線を施す。	茶褐色	1mmの砂粒を含む	普通	(翻) 1/4	
甌	(29.2)	5.3(翻)	外面削りの為調整不明。内面口縁部を調整、内面削りを施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	普通	(翻) 1/8	
甌	(13.5)	3.3(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に6条の平行沈線が残る。口縁端部欠損。	赤褐色	0.5~0.8mmの砂粒を多く含む	普通	(翻) 1/4	
甌	(翻) 6.5		外面及び内面口縁部を調整、内面削りの為調整不明。 外口縁部に僅かに沈線が残る。口縁端部欠損。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/5	
甌	(17.1)	3.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に4条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~0.8mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/8	
甌	(11.6)	3.7(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。	暗褐色	0.5~0.8mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/10	
甌	(13.7)	3.7(翻)	外面削り調整、内面削りを施す。外口縁部に8~9条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	良 好	(翻) 1/10		
甌	(11.5)	2.8(翻)	内外両面に施調整を施す。外口縁部に4条の平行沈線を施す。	茶褐色	良 好	(翻) 1/8		
高环	21.4	4.5(翻)	内外両面に施調整を施す。口縁端部に平坦で4条の沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少量化	良 好	(翻) 1/7	
高环			外面削り調整、内面削りを施す。口縁端部及び脚部欠損。	黄褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/5	
器 台	17.5	4.1(翻)	内外両面に施調整を施す。外口縁部に9条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/4	
器 台	(16.8)	4.4(翻)	土器器・外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。	黄褐色	良 好	(翻) 2/3		
甌	(15.6)	4.2(翻)	土器器・外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。	褐色	普通	(翻) 1/8		
甌	15.6	3.8(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。外口縁部に4条の平行沈線を施す。頭部に擦拭工具による剥突痕を施す。	黄褐色	0.5~1mmの砂粒をやや多く含む	良 好	(翻) 1/5	
甌	13.5	4.3(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に5条のしっかりした平行沈線を施す。	茶褐色	普通	(翻) 1/6		
甌	15.6	2.6(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に5条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒をやや多く含む	良 好	(翻) 1/8	
甌	(19.0)	3.0(翻)	内外両面に施調整を施す。外口縁部に6条の平行沈線を施す。	茶褐色	普通	(翻) 1/8		
甌	15.5	4.9(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に不規則な平行沈線を10条施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/6	
甌	19.5	4.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に平行沈線を施すが、中央の8条が明瞭に残る。外口縁部には不明瞭な巻きが残る。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少量化	良 好	(翻) 1/5	
甌	17.4	4.7(翻)	内外両面に施調整を施す。外口縁部に15~16条の僅かにこんだ平行沈線を施す。	黄褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/4	
甌	19.5	6.5(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に僅かに7条の平行沈線が残る。	茶褐色	0.5~3mmの砂粒を少量化	普通	(翻) 1/6	
甌	(19.6)	5.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。外口縁部に7条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	普通	(翻) 1/10	
甌	23.3	5.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。外口縁部に9条の平行沈線を施す。頭中に炭化物付着。	黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒を少量化	普通	(翻) 1/11	
甌	17.4	6.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に13条の平行沈線を施す。頭部に円孔が2個残る。	茶褐色	0.5~2mmの砂粒をやや多く含む	普通	(翻) 1/3	
甌	25.2	5.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に5条の平行沈線が残る。	茶褐色	0.5~3mmの砂粒を少量化	良 好	(翻) 1/5	
甌	15.2	5.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に7条の平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少量化	良 好	(翻) 1/5	
甌	17.3	4.0(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に8条の若干歪んだ平行沈線を施す。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を含む	良 好	(翻) 1/6	
甌	(17.3)	3.5(翻)	外面及び内面口縁部を調整、内面削りを施す。 外口縁部に5条の不明瞭な平行沈線が残る。	茶褐色	0.5~1.5mmの砂粒を含む	普通	(翻) 1/10	

遺物観察表 6

種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	粒 度	土 質	燒 成	備 考
153 爪	17.4	4.2(翻)	内面口縁部に指捺痕残る。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。縁中に炭化物付着。外面部にハケ状の縫が既に残る。	黒褐色	1~2mmの砂粒をやや多く含む	普通	(翻) 1/10
154 爪	(15.4)	5.5(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りを施す。外面口縁部に沈線が残るが不明瞭である。頭部に工具による刺突紋を施す。	暗褐色	0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含む	普通	(翻) 1/7
155 爪		5.6(翻)	内外共に口縁部撫調整、外面に指捺痕が残るが他調整不明。外面口縁部に8条の細い平行沈線が残る。口縁部欠損。	黄褐色	0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含む	普通	(翻) 1/4
156 爪		6.2(翻)	内外共に撫調整を施す。外面口縁部に4条の平行沈線が残る。口縁部欠損。	黄褐色	0.5mmの砂粒を含む	普通	(翻) 1/4
157 高環器	(翻) 3.0		外面及び内面底部撫調整、内面削調整不明。	黒褐色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	普通	(翻) 1/10
158 器 台	14.5	5.0(翻)	内外共に撫調整を施す。外面に微かにハケ目調整が残る。外面丹張りを施す。	褐褐色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	良好	(翻) 1/10
159 器 台	15.3	5.7(翻)	内外共に撫調整を施す。外面口縁部に12条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	黒褐色	0.5~1mmの砂粒をやや多く含む	普通	(翻) 1/5
160 器 台	(翻) 6.3	18.8	外面4条の縦撥き紋、内面筒部に指捺痕が残り、他削りを施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	1~2mmの砂粒を少量含む	良好	(翻) 1/7
161 底 部	(翻) 2.3	6.0	外面底部調整不明、他へら磨き、内面削調整を施す。	黒褐色	1mmの砂粒含む	普通	(翻) 1/4
162 底 部	(翻) 1.7	5.0	外面削調整を施す。底部側面に指捺痕が残る。外面丹張りを施す。	黒褐色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	普通	(翻) 9/10
163 肥 手			--	茶褐色	0.5~2mmの砂粒を多く含む	普通	
164 壺	16.0	4.7(翻)	土器器、外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りを施す。外面炭化物付着。	茶褐色	0.5~1mmの砂粒を少量含む	普通	(翻) 80%
165 壺	(20.4)	4.2(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りを施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	茶褐色	密	普通	(翻) 1/5
166 壺	(21.2)	4.0(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面頭部へ hakkari び及削りを施す。外面口縁部に11~12条の平行沈線を施す。	褐色	密	良好	(翻) 1/6
167 爪	(13.4)	2.7(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りを施す。	褐色	1~2mmの砂粒を少量含む	良好	(翻) 1/4
168 底 部	(翻) 1.9	(5.0)	外面削調整を施す。内面削調整不明。	褐色	密	良好	(翻) 1/4
169 筋	(24.0)	4.5	外面共に縫合し刻削調整不明。外面丹張りを施す。	褐色	密	普通	(翻) 1/10
170 爪	14.0	2.3(翻)	外面共に撫調整を施す。外面口縁部に内底1条、その他の4条の平行沈線を施す。外面に炭化物付着。	褐色	密	良好	SX-33 (翻) 1/8
171 筋	(17.2)	3.6(翻)	外面共に撫調整を施す。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	赤茶色	0.5~1mmの砂粒を多く含む	良好	SX-12(翻) (翻) 1/12
172 爪		2.5(翻)	外面共に撫調整を施す。口縁部欠損。	褐色	1~2mmの砂粒をやや多く含む	良好	SX-3 (翻) 1/10
173 刀 子			長さ8.1cm・幅1.9cm				SX-26
174 壺	20.0	15.0(翻)	口縁部は内外共に撫調整、内面削削り。外面疤痕毛剥離を施す。外面底部に日輪による羽状紋を施す。	淡褐色	密	普通	SK-X (翻) 1/2
175 壺	(16.0)	3.0(翻)	外面共に撫調整を施す。外面口縁部に3条の平行沈線を施す。	褐色	1~2mmの砂粒を少く含む	良好	(翻) 1/6
176 底	(15.2)	3.8(翻)	内外共に撫調整を施す。外面口縁部に6条の平行沈線を施す。	褐色	2mmの砂粒を含む	良好	(翻) 1/8
177 筋	(19.5)	2.9(翻)	内外共に撫調整を施す。外面口縁部に6条の平行沈線を施す。	赤茶色	1~2mmの砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/14
178 爪	(19.0)	3.7(翻)	外面共に撫調整を施す。外面口縁部に6条の平行沈線を施す。	淡褐色	密・1~2mmの砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/12
179 底	(18.0)	8.3(翻)	磨滅しているため調整は不明瞭だが、内外共に撫調整を施す。外面口縁部に4~5条の平行沈線が残る。	褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/6
180 爪	(23.2)	5.7(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りの為調整不明。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	褐色	1~2mmの砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/9
181 爪	(15.4)	5.7(翻)	外面及び内面口縁部撫調整、内面削削りの為調整不明。外面口縁部に10条の平行沈線を施す。	褐色	砂粒・2~4mmの砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/7
182 爪	(17.4)	7.4(翻)	内外共に撫調整を施す。外面口縁部に9~10条の平行沈線を施す。	褐色	砂粒・1~3mmの砂粒を多く含む	良好	(翻) 1/4

図 版

図版 1



調査地全景

図版 2

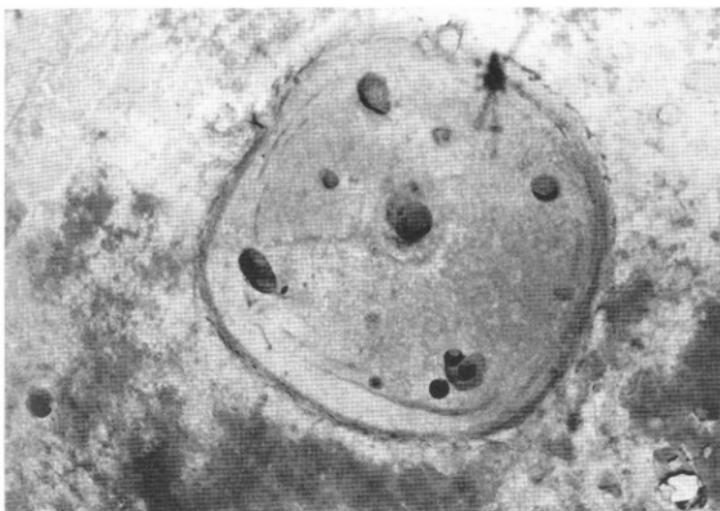


SI-01全景



SI-01遺物出土状況

図版 3

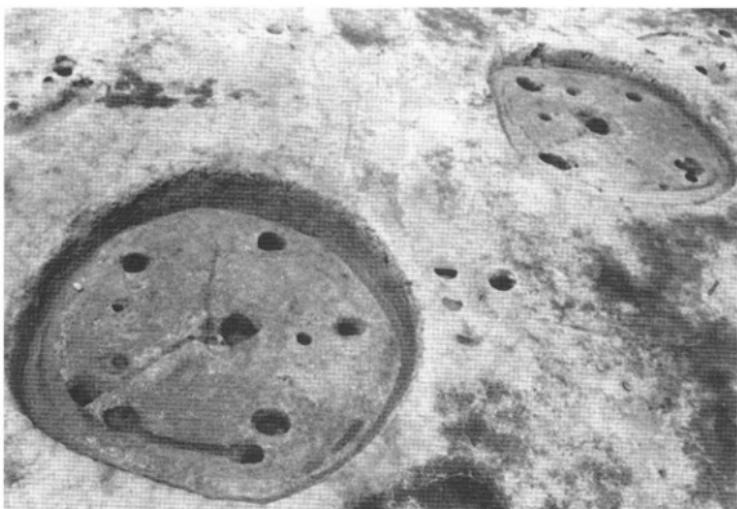


SI-02全景

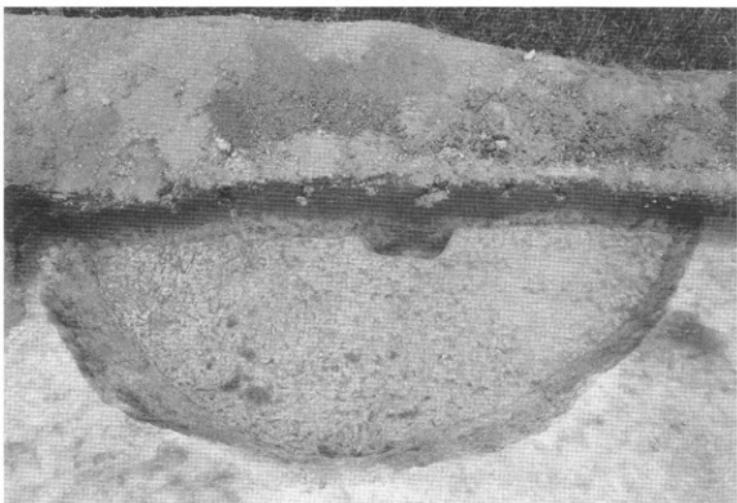


SI-02遺物出土状況

図版 4

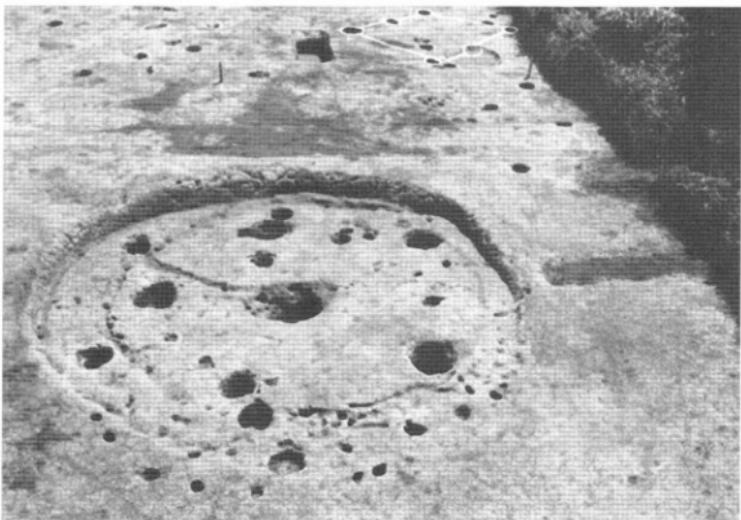


SI-01・02



SI-03全景

図版 5

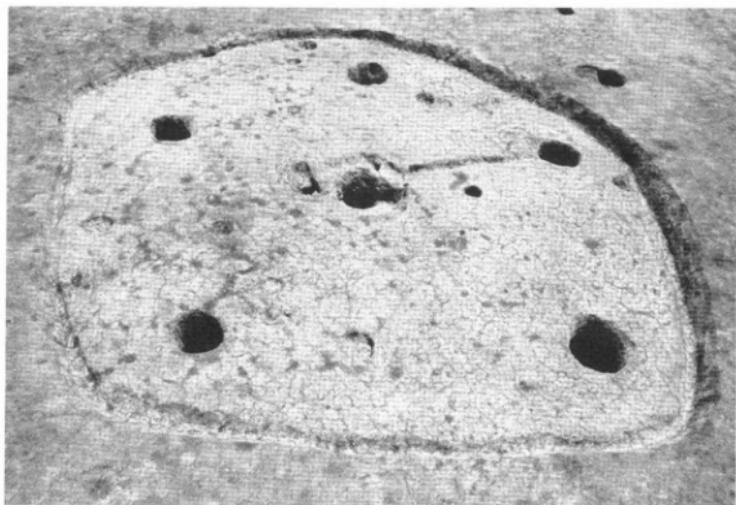


SI-04全景

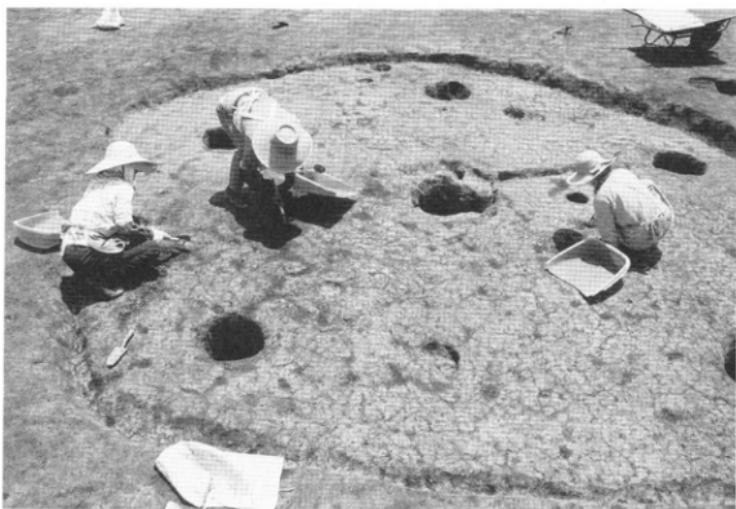


SI-04遺物出土状況

図版 6

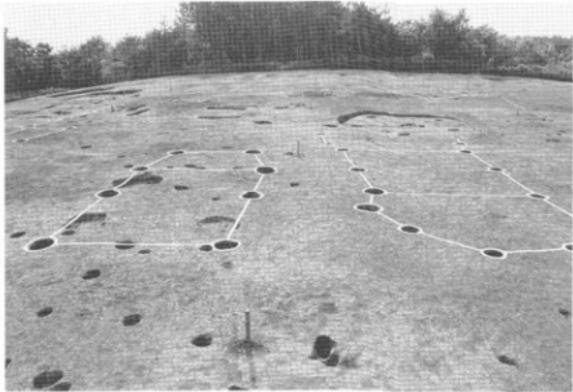


SI-05全景

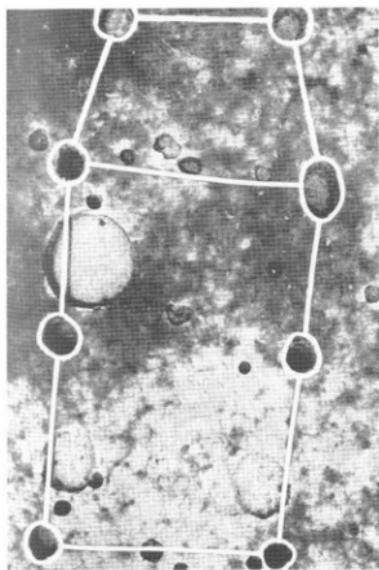


作業風景

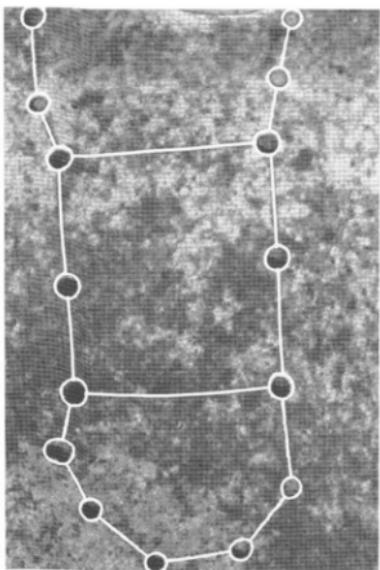
図版 7



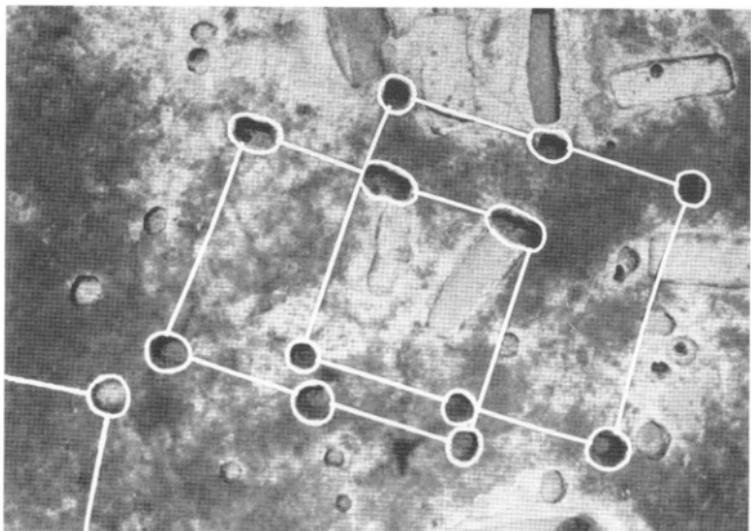
SB-02・01



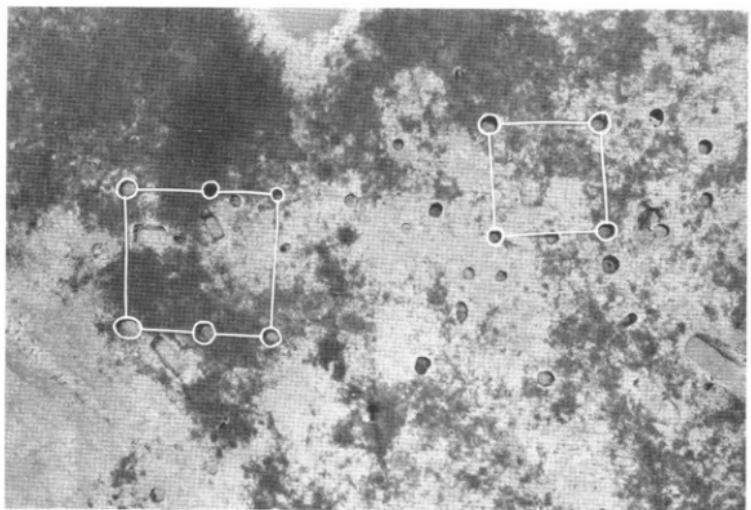
SB-02



SB-01

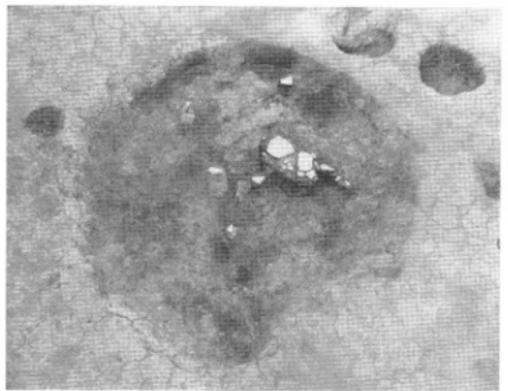
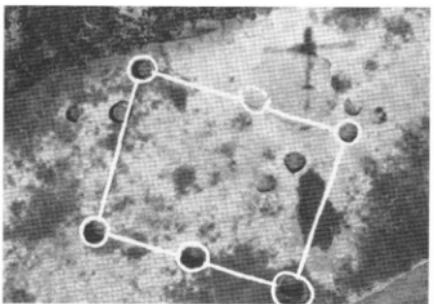
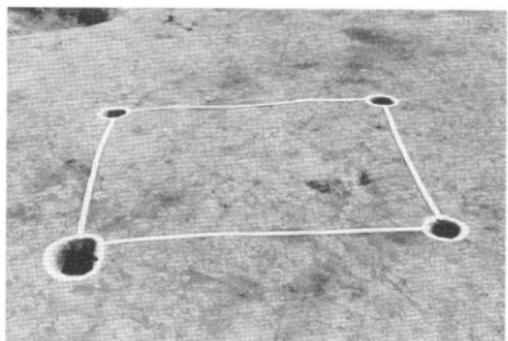


SB-03・04

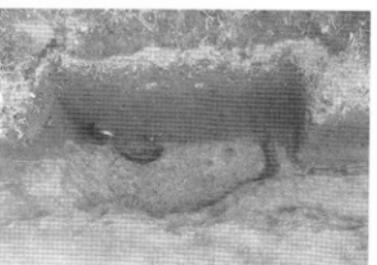
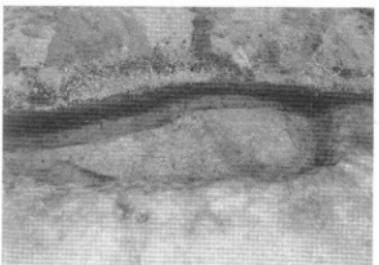
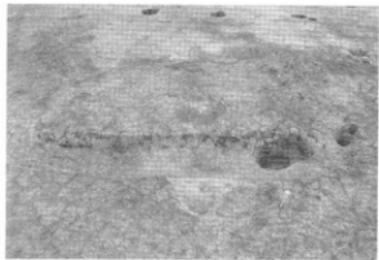


SB-06・07

図版 9

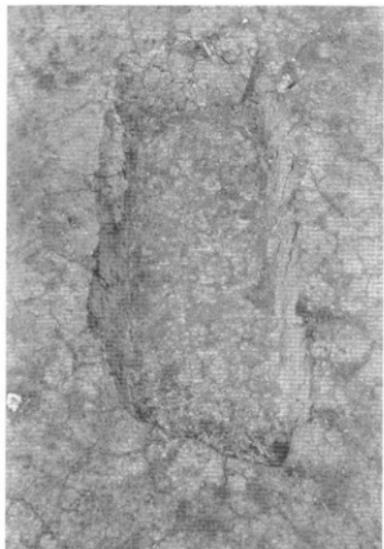


図版10



SD-01	SD-01 遺物出土状況
SD-02 北側より	SD-02 東側より
SD-03	SD-03 東側土壤
SD-04	

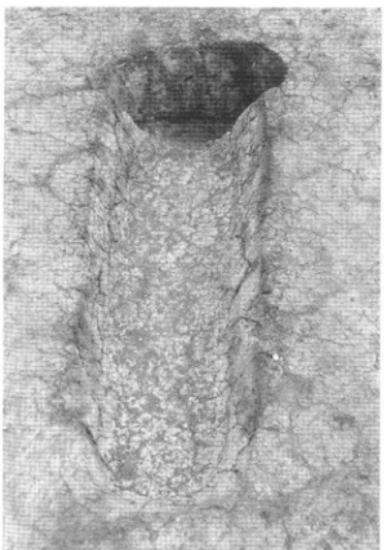
図版11



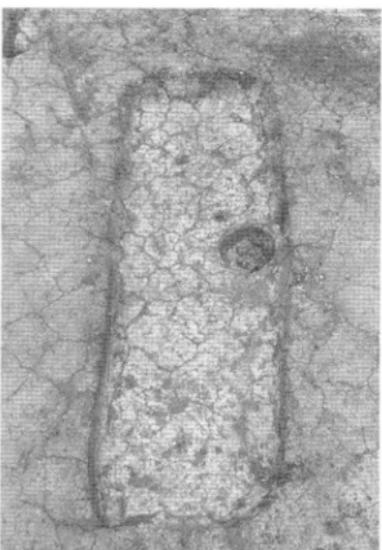
SX-01



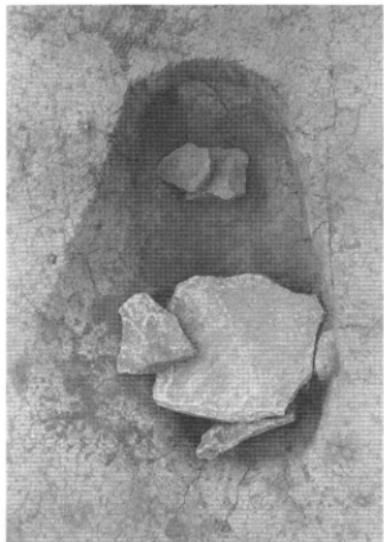
SX-02



SX-06



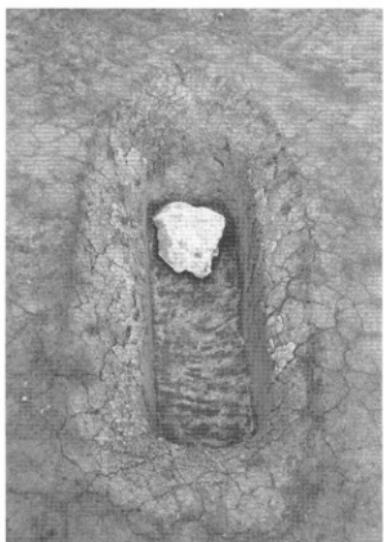
SX-09



SX-11



SX-17

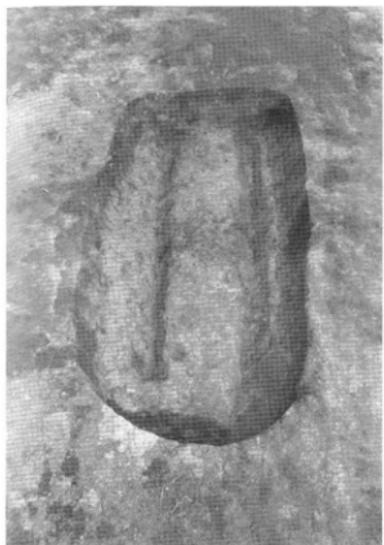


SX-12



SX-12遺物出土状況

図版13



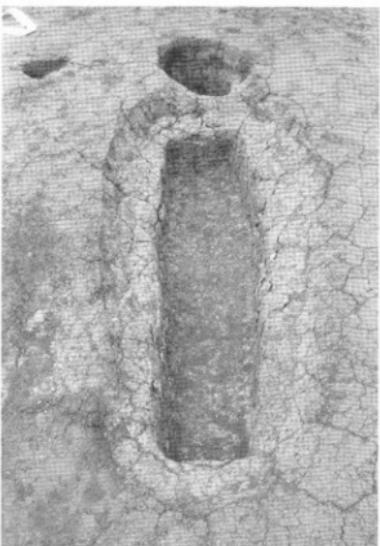
SX-15



SX-16

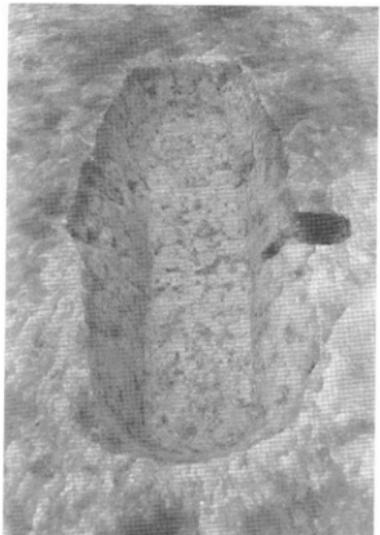


SX-29

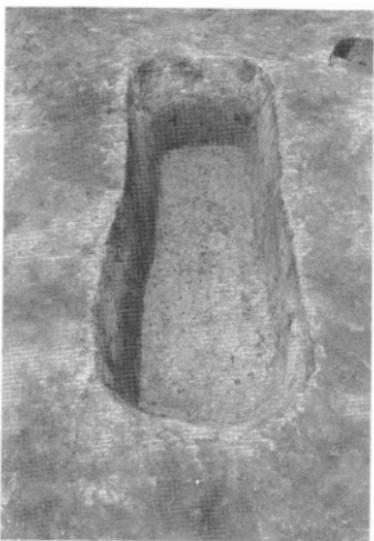


SX-08

図版14



SX-18



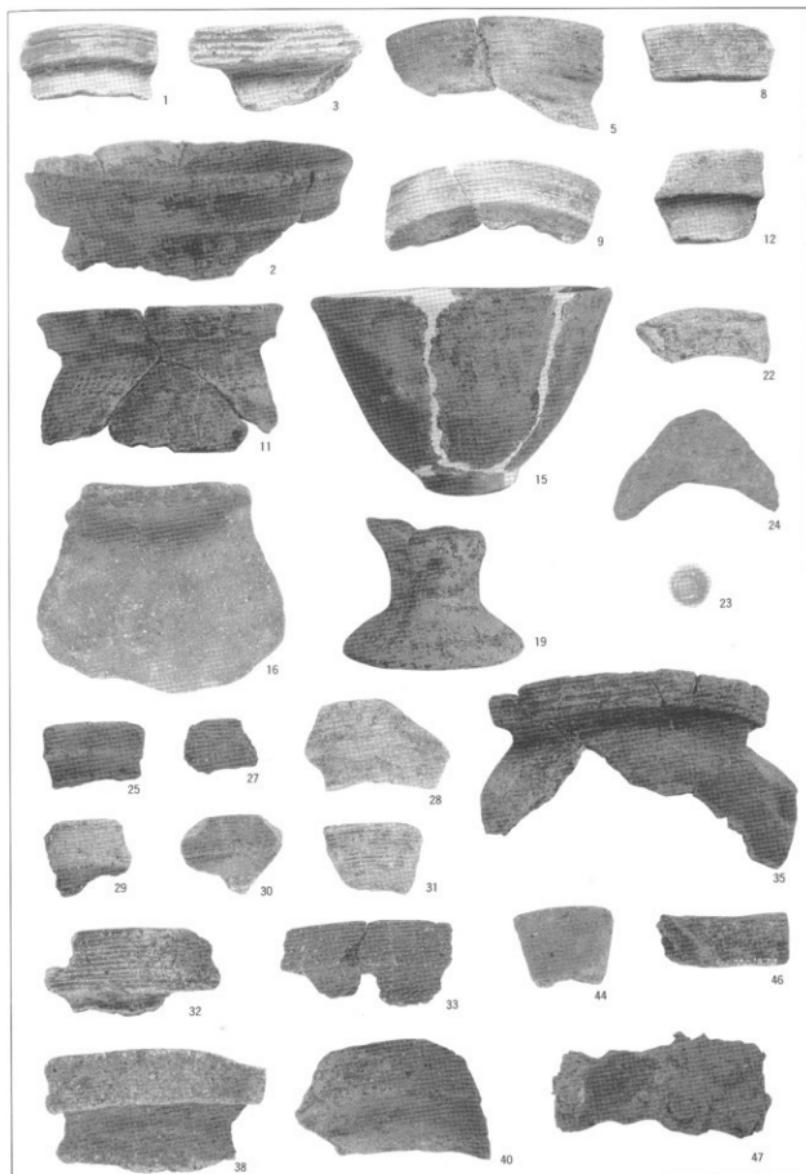
SX-19



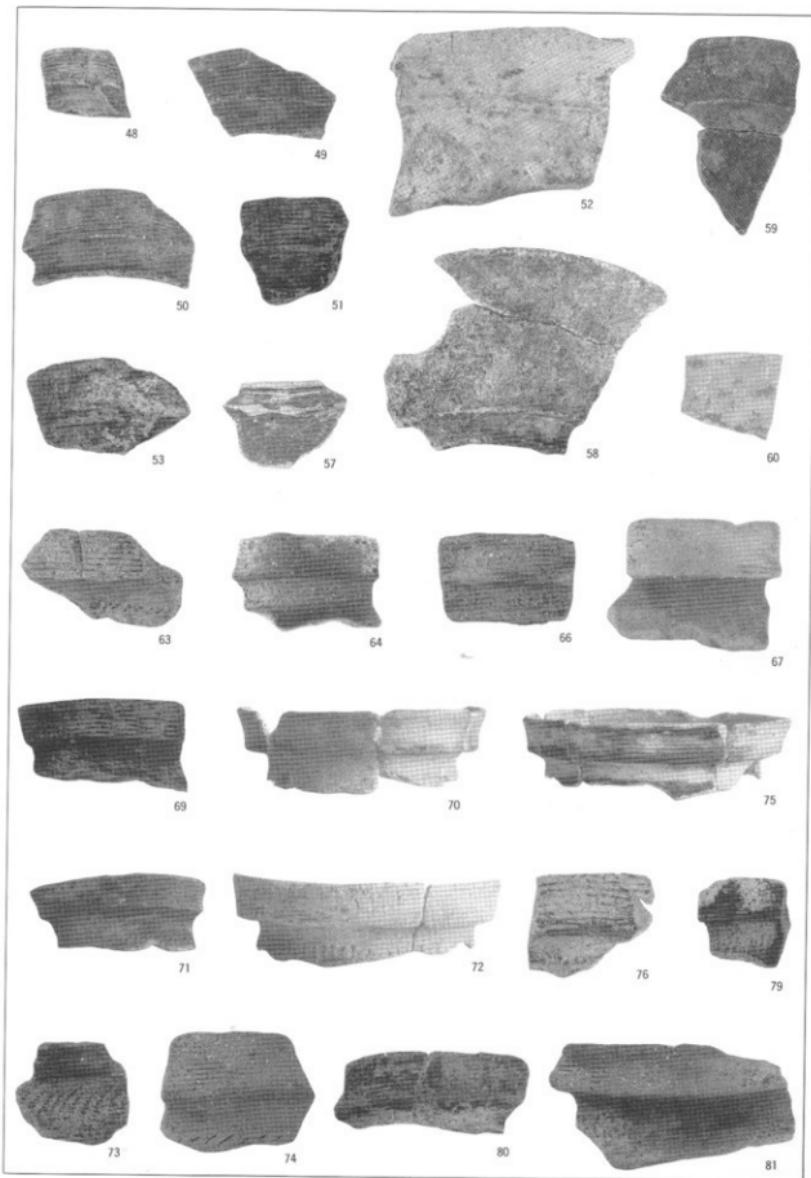
SX-30



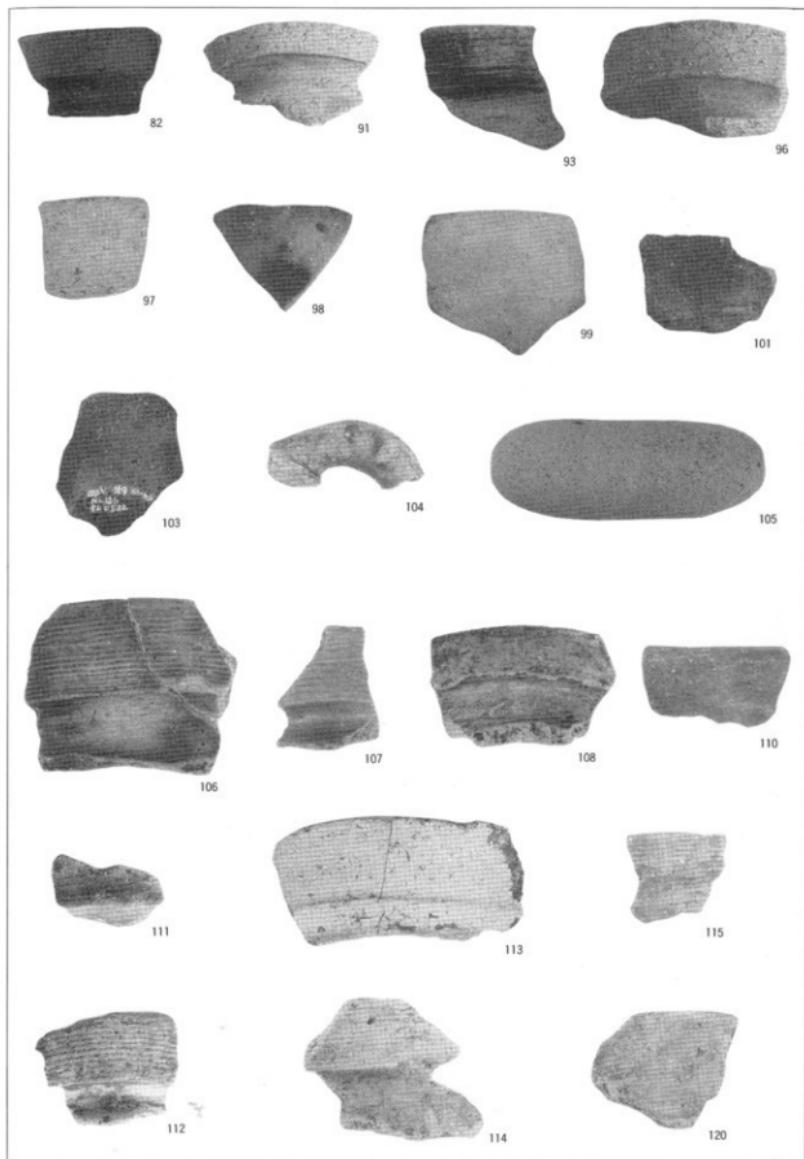
SX-31・32



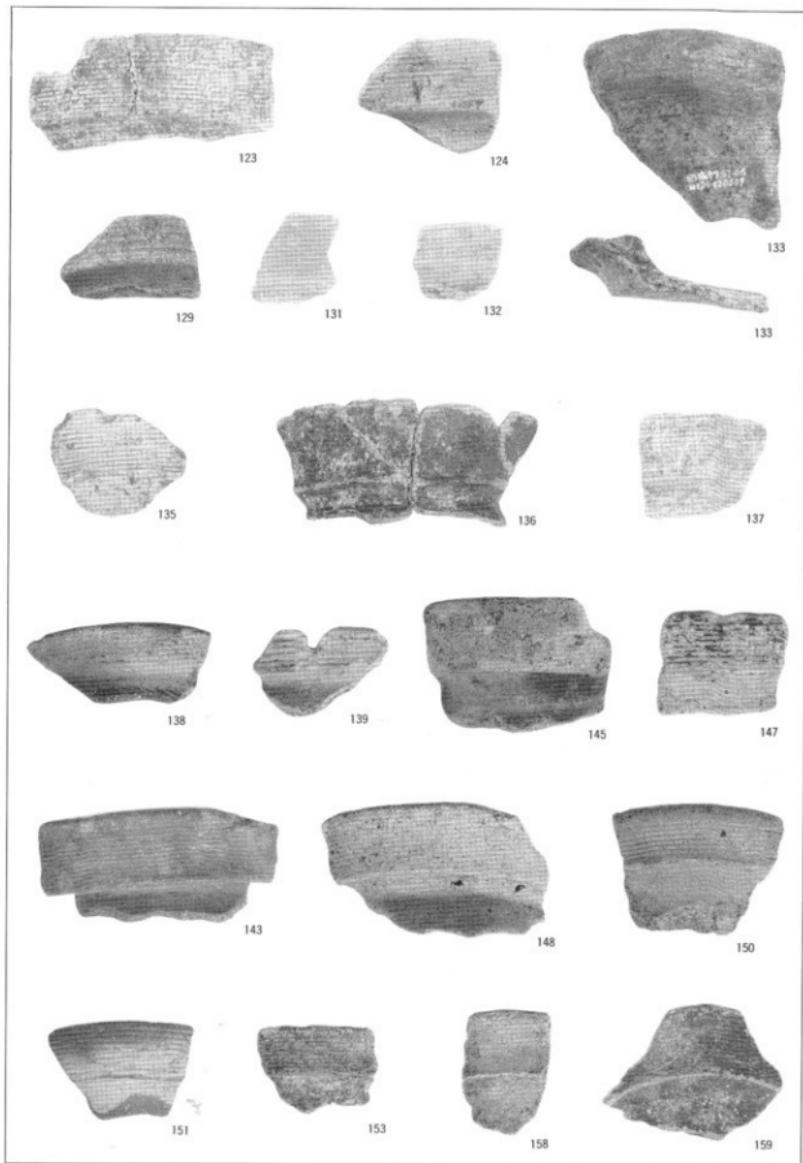
出土遺物(1)



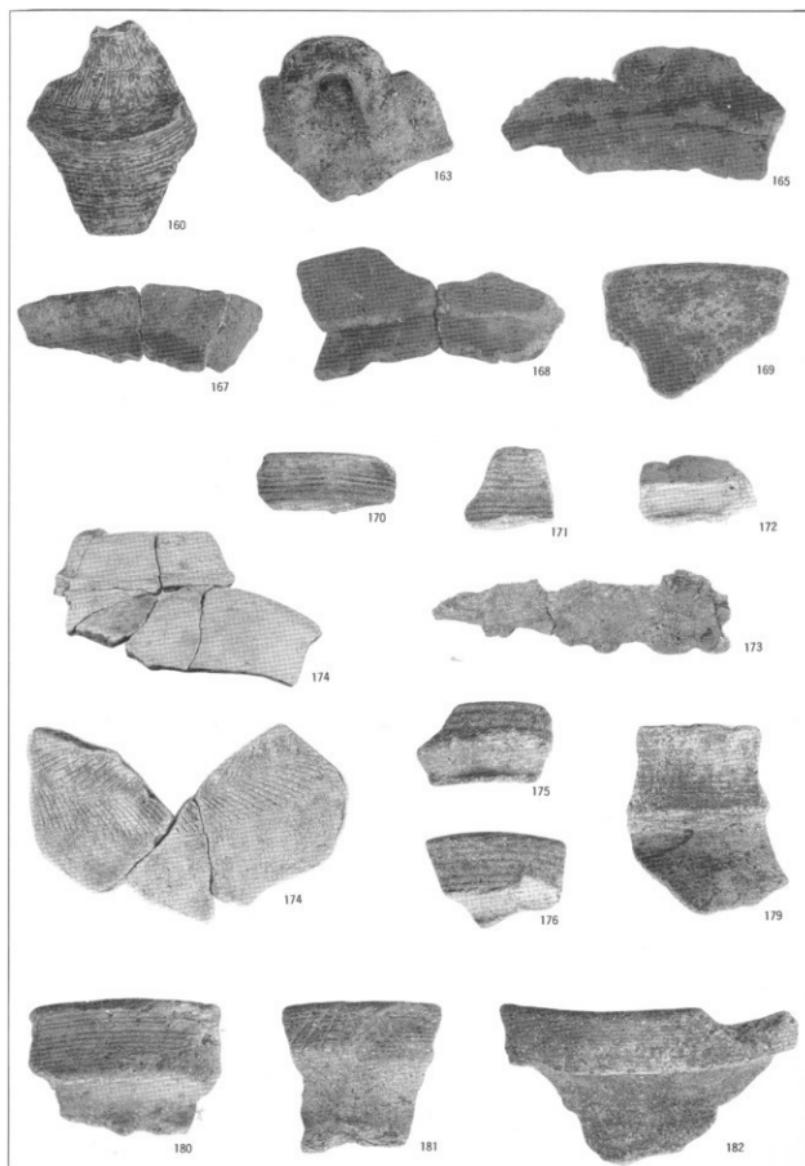
出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)



出土遺物(s)